
兄と俺とのはちゃめちゃ冒険記

気まぐれな黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄と俺とのはちゃめちゃ冒険記

【Nコード】

N9938J

【作者名】

気まぐれな黒猫

【あらすじ】

「ちよつと異世界に行ってくる！」

と姿を消した兄からメールが届いた。

メールの内容は至極簡単

「魔王に捕まったから迎えにきて」

と書かれていた。

いったい兄に何があったのか、そもそも兄はどこに行ったのか。

苦労性な弟が兄を探して旅に出る新感覚ファンタジー&コメディー

！！

プロローグ（前書き）

電車に揺られてウトウトしてた時に浮かんだので勢いで書いた。
更新はいつになるか分からない。

以上のことを踏まえてお読みください。

プロローグ

「ちよつと異世界に行つてくるわ!」

そんな言葉を残して兄が失踪した。

それが約一ヶ月前のこと。

品行方正を美学とした兄こと久我^{いが} 聖^{せい}の突然の奇行に、俺こと久我^{いが} 門音^{かどね}は考えることを放棄した。

一体どれだけの時間そうしていたのか、気が付いた時には兄の姿はなく、いくつかの服と小物がきれいになくなっていた。

俺と兄の部屋は同じだが、そんなそぶりは全く見せなかった。ただ、兄がおかしくなった。

俺にはそれだけしか理解できなかった。

それから何事もな・・・・・・かったわけでもない。

まず、双子の妹である久我^{すずね} 鈴音^{すずね}がキレて暴れた後泣き始め、盛大に被害を被った俺が宥めるはめになった。

鈴音は基本優秀なやつだが事、兄の聖の事となると暴走する。

この事からわかるように鈴音は重度のブラコンなのだ。

次に、家に居候している親戚の樋山^{ひやま} 円^{まどか}が冷静に、警察に電話してくれたまではよかったが、両親が使い物にならず俺が対応しなければならなかった。

電話した円はクールビューティーよろしく黙りでかつ、見た目小学生だから警察も対応に困っていた。

円は実質中学二年生で、鈴音は高校二年生なのだがどちらが姉かと言われれば間違いなく円の方が内面的には大人びている。

そんな俺の携帯に一通のメールが届いた。

メールの相手は失踪した兄からで、内容はいたって簡単。

「魔王に捕まったから迎えに来て」

思わず「どこに!？」と自室で叫んでしまったのか仕方の無いことだろう。

これが俺の不幸の始まりだった。

——以下キャラクター紹介——

久我 聖こが せい

性別：男

年齢：19

概要

久我家の長男にして品行方正の代名詞。

スポーツは得意ではないが知識量がずば抜けて高く、アメリカへの留学も本気で考えていたが結局趣味のゲームプログラムを組むのに適当な大学へと進学する。

人当たりが良く笑顔を絶やさないが、真はしっかりと持っていて気に食わないことは納得するまで追及する。

非現実的なことは認めず、科学で説明できないことは無いと言うのが今までの口癖である。そのためなぜ今回のような奇行に走ったのか不明である。

久我 門音こが かどね

性別：男

年齢：17

概要

当物語の主人公で久我家の次男。

事あるごとに兄である聖と比べられるのでグレて髪を白に近い銀髪

に染め上げて不良っぽく振舞っているが、根っからの悪人ではなく
元来の面倒見のいい性格から苦勞が絶えないでいる。

今現在通う曽根崎高校でもなんちゃってヤンキーなどと不名誉なあ
だ名を頂戴しており、クラスメイトからは総じてコウガと呼ばれて
いる。

運動神経が良く、スポーツ全般をそつなくこなす。

久我 こが 鈴音 すずね

性別：女

年齢：17

概要

主人公である門音の双子の妹で久我家の長女。

多少幼い精神年齢をしているが聖に続く博識の持ち主で、門音ほど
ではないが運動神経も良い。ただし家事全般が壊滅的で普段は門音
と居候である円に頼りつきりである。

長男である聖に恋心を抱くブラコンであり、後を追うように名校と
言われる曽根崎高校に入学する。その際、門音を巻き込み入学でき
るだけの知識を一週間で叩き込んだ。

曽根校のマドンナと言われる美貌を持つが、門音を無理やり女装さ
せ参加させた美人コンテストで負けたので自信をなくしている。

樋山 ひやま 円 まどか

性別：女

年齢：14

概要

久我家に居候している親戚で樋山家の三女。

寡黙にしてクールビューティー、門音以外との意思疎通が苦手で周
囲からは不思議な子と思われる。

上の姉二人がぶっ飛んだ性格をしておりそのせいか非常に大人びた性格をしていて、物事を冷静に判断することができる。ハードカバ―の本を何時も持ち歩き、有事の際にはそのまま武器として使用する。

が門音と買い物に出かけた時に買ってもらった本は丁重に保管してある。門音が少し気になるこの頃である。

プロローグ（後書き）

特に意味は無いんですけどね

門音「本文よりキャラ紹介の方が長いってどういうことよ？」

天の声「しょうがない、思いついたの書き殴っただけだし」

門音「……………はあ、まあ次の話しに期待しようか」

天の声「あ……………それなんだけどさ、勢い任せだから次のことま
ったく考えてないのね」

門音「つまり？」

天の声「しばらく更新できません（はーと）」

門音「生きてたら次の話しでまた会おう」

天の声「え、ちょ、鉄パイプもってなんて笑顔！ どこそこのメイカ
ーさんもびっくりぎゃあああああああああ！！！！」

どうしてこうなった・・・

さて、少し状況を整理しようか。

今俺が居るのは煌びやかな調度品がこれでもかと置かれた家のリビングより広い一部屋だ。

キングサイズのベッドに沈み込むほどに柔らかい絨毯、置かれたテーブルや椅子も一目で豪華な物だとわかる。

そう、ここは中世よろしく建てられた城の客室である。

どれほどの広さがあるか分からないが一日二日では見て回るのは不可能だということだけは分かる。

そもそも、なぜ俺はこんなところに居るのか、そっちの方が重大な疑問なのだがこれを気にしっかりと思い出すことにしよう。

回想

兄からのメールに再び俺の思考はショートしたに違いない。

でなければ、部屋に入ってきた妹が俺の手から携帯を奪い取るのを黙ってみているわけが無いのだ。

「ちょっとヤミ、これはどういうこと？」

鬼神阿修羅と同等の気迫を放つ鈴音にポツポツと事のあらましを説明すると、鈴音は笑顔で

「何が何でもコウ兄迎えに行つて来い」

と、俺の首を締め上げながらお願い・・・元い、命令された。

このとき俺は三途リバーに腰までどっぷり浸かっていた事だろう。

閑話休題

俺はまず兄が奇行に走った原因を調べることにした。

兄が劇的に変わってしまったのはあの時のあれが原因だろう。

謎のホームページとくだらない謳い文句、あの時俺は何かのみ間違いだらうと速効で目を逸らしたのを覚えている。

『あなたも勇者と共に冒険に出てみませんか？』

あまりにも痛すぎる。

そんな馬鹿げたホームページを兄が見ていたなどとは思いたくなかった。

現実思想で非科学的なことは目で見るまで信じない、現実主義者なあの兄が、まさか魔法だのなんだのそんな物をなぜに調べているのかも理解不能だが、あれが原因なのは間違いないだろうと俺は思っている。

基本俺はパソコンを使わないから唯一の使用者であつた兄が居なくなつてからはまったく起動していないそれを一月ぶりに起動させる使わないからと言って使えないわけではない、そんなことより俺は外で“狩り”をしている方が好きなのだ。

パソコンが起動してインターネットを立ち上げる。

そこから履歴を調べて兄が見ていたであろう妖しさ爆発のあのホームページに飛んだ。

やはりいつ見ても目を逸らしたくなるな。

トップにでかかと

『あなたも勇者と共に冒険に出てみませんか？』

と書かれており、勇者一行とか魔王軍とかバックグラウンドとかのタグがあった。
とりあえずまずはバックグラウンドから見るべきだろうとクリックする。

そこに書かれている内容はファンタジー系小説ではありきたりもいいところなほどありきたりなものだった。

~~~~~

あれから数時間、いくつか分かったことがある。  
まずその星に名前はない。

いくつかに別れた大地を称する名称があるだけだ。

まずは一番大きな大陸がラナセアと言う。

この大陸には三つの王国があり均衡を保っていると書かれている。

次に大きい大陸にはハウメルと言う名前があり、広大な森と山が連なる魔物の巣窟らしい。

後は小さな島々が連なるピノユ列島がある。

ここは別名東国とも呼ばれ独特な文化を持っているらしい。

まずはラナセアという名前をクリックして詳細を開く。

台形を斜めに崩したような形をした大陸を丁度三等分して、北にベルバンド、東にクオルカン、西にマウケラスと書かれている。

マウケラスは商業国家で物流の中心となっているらしい。

東のクオルカンは領土内山脈と鉱山を持ち、良質な鉄を国外におおく輸出している。

北のベルバンドは亜人たちの暮す広大な森になっている。

ここの国だけは王が人間ではなく長寿を誇るエルフらしい。

さて、戻って次にクリックしたのはハウメルという大陸だ。

広さがラナセアの半分くらいで、殆どが人の手の入らぬ森で覆われており、連なる山々は地球で言うエベレストと同等かそれ以上の標高を持っている。

山頂はほぼ雪で覆われており永久凍土で生物は殆ど居ない。

最後にピノユ列島だが、島々を全て合わせてもハウメル大陸の三分の一にも満たない。

しかし比較的日本に近いらしく四季があり、武器も日本刀のような切ることを主体にした武器が主で他にも薙刀やクナイなんかもあるらしい。

ホームページを見ててふと興味を引かれた項目がある。

言わずもかな、魔法だ。

魔法には大きく三種類あるらしい。

元素魔法、非元素魔法、精霊魔法の三種類だ。

ただ、魔法に分類されない東国の式術と言うのがあるがこれは別項目だ。

元素魔法は四大元素を基にした物だ。

火水風土、これを元に、鉄、氷、雷、木などの派生系も数多く存在している。

次に非元素魔法だが、こちらは元素を用いない空間、時間、変化などが上げられる。

人間に使えるのはここまでだが、亜人族にはさらに精霊魔法というのが使えるらしい。

精霊魔法は自然に大きく影響され、水辺なら水系統、風が強ければ風系統が、という風に威力が変わる。

そのため、自然との共存を絶った人間には使えない。

魔法には決まった形式が無く、一般人らが各々好き勝手に使える。が歴史に名を残す程に強力な者は少ないらしい。

一応、基本魔術書はあるらしいがあくまで基本、そこから自由に變化させていくのが魔術師としての第一歩らしい。

魔法を使うには呪文を唱えるか、魔方陣を描くかする必要がある。これは世界に漂う魔力を集め、己の内にある魔力を混ぜ合わせる工程だからだ。

それ以外の事は書かれていなかった。

・・・なるほど、可能性は無限大って訳ですね！

そんな馬鹿なことを頭の片隅に追いやり、式術について見てみることにする。

式術とは、符術や陰陽道に近い物だった。

紙に特殊な文字を書き込み、それを媒体として行なう儀式や複雑に組まれた法則や関係を表したものである。

まんま陰陽師である。

関係も五行説の通りで、木火土金水で構成されている。

なるほどなるほど、異世界でも日本の文化は異質なのですね！

一頻り重要項目には目を通し、最後に「異世界へ」と書かれたタグをクリックしようとしてふと、手が止まる。

これを押した瞬間すっ飛ばされるとか？

・・・・・・無いと言いついてない。

俺はホームページをそのままに準備を始めた。

旅行用のトランクに3日分の着替えと必要そうな物を片っ端から突っ込んだ。

乾電池交換式携帯充電器、単三電池30+2本パック、i。odク。シツク120G・6000曲入り、乾電池交換式i。od充電器、手鏡、懐中電灯、デジタルカメラ、筆記用具、メモ帳、etc・・・以上をトランクに詰め込んで、自分の手に持った荷物を確認する。

ジープンの右ポケットには携帯、左には財布（小銭要れ）、ベルトには家宝であり天下五剣に数えられる、三日月宗近（本物）を引っさげていざ、「異世界へ」をクリックした。

・・・・・・・・・・・・・・・・？

何も起きない。

靴まで履いて部屋の中でトランク片手に刀引っさげて、こんな格好を見られたら笑いものもいいところである。

俺がイラっとして宗近を引き抜こうとした矢先、パソコンの画面から魔方阵と呼ばれるそれが浮かび上がり、俺を包み込んだ。

一瞬のホワイトアウトの後、気がつけば俺はどこも知れぬ平原に突っ立っていた。

「マジで異世界に吹っ飛ばされちまったよ・・・・・・・・」

あまりにも唐突過ぎる状況に愕然とするあまり、周囲に人が居ることにまったく気がつけなかった。

気づいた時には既に槍の先を向けられ、身動きの取れない状態で、逆にそれが俺を冷静にさせた。

中世のプレートアーマーらしき物を着込んだ兵士に、一人だけ馬に乗ったえらそうな奴が警戒しつつこちらに近づいてきた。

「貴様、何者だ？　ここでいったい何をしている」

おそらくこいつはどこぞの国から派遣された騎士団の団長か副団長とかいう辺りだろう。

ならば話は早い。

「俺は久我<sup>こが</sup> 門音<sup>かどね</sup>、以前この世界に現れたはずの久我<sup>こが</sup> 聖<sup>せい</sup>の弟だ」

そう名のつた俺はその騎士たちに連れられて城まで案内された。  
そうして今日は遅いからと部屋に案内された訳だ……………

だって庶民ですからっ！

ぶっちゃけ眠れるはずが無い。

一庶民である俺が行き成り破格待遇など受けても落ち着かない。

ふつかふかのベッドに体を横たえると、もふっと沈み込むように柔らかな感触に包まれる。

とても気持ちがいいが、それが眠りを促してくれるかといえば答えはNOだ。

もともと、超が着くほどのビビリだった俺は知らない場所では安心して眠ることができない性質なのだ。

今でこそ不良なんてやってでかい態度でいるが、警戒心が異常なほど高いところは直っていない。

仮にこの場で眠れたとしてもちよつとした物音で直ぐに目を覚ますだろう。

まあ、それよりも監視の目がある時点で眠れないのだから……それはさておき、眠れないのであれば眠れないでやることは多々ある。

まずは三日月宗近の手入れ、今まで飾って置くだけだったからしっかり確認しないと。

次に慣らし、真剣を持つなど今までにはなかったので感覚を掴んでおかなければならない。いざと言うときのために。

それが終われば後は気功呼吸法で体の隅々までは意識を行き渡らせる。

右手に持つ宗近を意識するのと同じく、監視の目がどこに向けられているのかも意識する。

ピリピリと肌が粟立つ感じが首筋と左胸にした。

不穏な事をすれば即座に始末するって事かな？

全く、穏やかじゃない。

意識した抜刀済みの宗近で向けられた視線を断ち切った。

まあ実際に切る訳ではなく、その素振りで相手を萎縮させ、一瞬目を閉じさせた間に移動すると言うものだ。

目を閉じてる間に移動されると、今までに居た場所にその姿を見つけられず、ややパニックになることがある。

真剣勝負ではその隙は致命的だ。が、今回はただの威嚇程度なのでさっさとベッドに戻る。

目を瞑って横になっていてだけでも体力は回復するからな。

翌朝、メイドさんが起こしに来るまでそうしていた。

~~~~~

なんとなく分かってはいたが、やっぱり王様との謁見は緊張する。

「ふむ、お主がコウキ殿の弟と申す者が」

流石一国の王だけあってプレッシャーが凄まじい。

「ああ、魔王に捕まったから迎えに来いと言われてな」

だがしかし、相手が誰であろうと俺は態度を変えない。

人間皆平等！

「貴様！王になんて口を！」

回りに取り巻く重鎮たちが敵意剥き出しで睨み付けて来る。

おおう、武官らしき人の殺気刺さるようだ。

「よい、してお主の名は？」

王の一言で一瞬で静かになった。

「俺は門音、久我 門音だ」

「ではカドネとやら、お主を魔王の元に向かわせるのは構わぬがコウキ殿には恩があるゆえ、その親者をみすみす死なすわけには行かぬ。そこで、我が国一の武人と戦い見事打ち勝つことができれば我が名を持つて全力で支援することを約束しよう」

「はっ！上等！」

頭が良くなかった俺は祖父に連れられて戦争中の国を巡り歩いたり、各国で武術を叩き込まれたりした。

中学時代の長期休みは全て地獄の特訓だった。

そんな祖父も1年前に「世界最強を目指す」とか言って旅に出たまま帰っていない。

強くなれた事には感謝している。だが、おかげで性格が歪みまくってしまったそうだ。

俺自身そんな気は全くないが、周りが言うのだからそうなのだろう。

「では今より半刻後、城の修練場にてカドネ対ヴァラルアの試合を行う！」

ヴァラルア、その名前がでた瞬間、場に緊張が走った。

どんな相手か知らねーが強い相手なら大歓迎だ。

だって庶民ですからっ！（後書き）

なんとなくたくましいお祖父ちゃんを出したかった。
ただそれだけなんだ

マジ、帰ってもいいですか？（前書き）

戦闘描写できと〜すぎワロス

マジ、帰ってもいいですか？

メイドさんの案内で修練場にたどり着いたのは良いのだが、思わず
回れ右をしたくなった。

見渡す限りに人人人

「よく来た、お主の武器は腰に下げている太刀良いか？」

審判を務めることになった騎士団長が訪ねてくるので頷いて返した。
相手は既に配置に着いているらしいので俺も指示された場所へ向かう。

………どういう事だ？

「ヴァラルアだよな？」

コクつと頷くので間違いないらしいが少女だ。
何をどう見ても12〜3歳の少女だった。

「では、確認する。勝敗は武器の破損、紛失、相手の死を持って決する」

「い、異議有り！」

「却下します、それでは開始！」

なんですと！？

行きなり開始された試合にさっと前を向くと、少女が自分の二倍程もある大剣を地面から必死に引き抜いていた。

なんか和む風景だなあとはいつつ最初の一步を踏み出して、その場を飛び退く。

今まで居た場所はいくつと斬られており、今までの緩んだ気持ちに絞め直した。

少女はニンヤリと口の端を吊り上げて、大剣を引きずりながら猛スピードで突っ込んできた。

「も、もしかしてバーサーカーか!？」

余談だが、銃の引き金^{トリガー}を引いて乱射していれば幸せな状態、あるいはそれで幸せを感じる奴の事をトリガーハッピー、ものを壊し狂ったように暴れ回る奴の事をバーサーカーと呼ぶ。

正直、超めんどくさい。

全く喋らないが目がギラついている。

成る程、緊張が走った理由がよくわかった。この手の輩は一度暴走状態に陥ると気絶するまで止まらないし、なまじ強さが半端じゃないから下手したら命懸けになる。

こんなことを考えながらも必死にヴァラルアの大剣を避けまくる。

まるで暴風の中にいるかのような錯覚に陥る。

剣を避けても剣風だけで体勢が崩される。

それでも気合いで避ける。

かすりでもしたら瞬時に挽き肉になりそうだ。

そんなのはごめん被りたい。

仕方がないがここは三日月宗近を使わせて貰おう。

こいつはなるだけ使いたくなかったのだが……

ヴァラルアから大きく距離をとって宗近に手を掛けた。

離れた俺を追うように駆けてきたヴァラルアが降った大剣に合わせ、宗近を抜刀する。

「祖父直伝の久我流抜刀術一ノ形、金失せ^{かなう}」

互いに振り抜いたその状態で動きを止めた。

一拍をおいてヴァラルアの大剣が根元からずり落ちた。

あ、あぶねえ！

力加減間違えたかと思った、鉄がなんの抵抗もなく斬れるとは・・・

・・・

握った感覚からとんでもない刀だとは思ったがまさかここまでとは、恐るべし天下五剣。

宗近を鞘に収め、改めてヴァラルアを見ると、先ほど間でのギラついた目ではなくおっとりとした瞳に戻っていた。

啞然としていた騎士団長がはっと我に返り試合の勝敗を告げた。

旅に出ることにした。おまけつき

俺は今この上ない命の危機に曝されている。

俄然ドラゴンを思わせるほどの怒気とオーラを放つ国王と侍女達。対する俺は城のどこぞの壁に背を預けて逃げ道を探している状況だ。なぜこんなことになっているのか、これには海よりも深い理由がある。

先の試合で俺がヴァラルアの大剣を切ったのは覚えているだろうか？そのとき、力加減を間違えていたらしく、ヴァラルアの衣服までこすすっぱりと切り裂いてしまったわけだ。

試合終了が言い渡された後、時間差で衣服がはだけ、それに気づいたヴァラルアはやや顔を赤らめて「……………エッチ」と呟いた。思いのほか破壊力が強かった。

俺は何とか堪えたが半分くらいの兵士や騎士が鼻から血を噴射して倒れた。

そこに来て国王が切れた。

怒りの矛先は無論俺、俺はそのとき自分の上着をヴァラルアに着せていたところで、後ろを見ておらず、ヴァラルアが行き成り足払いをしてきたのに驚いてなすがままになっていたところ、ヒュンという音と共に髪が数本中に舞った。

……………は？

何が起こったのか理解できずに入ると、背後に居た国王が

「娘になんてことしてくれとるんじゃ貴様ああ!!」

怒気のはらんだ声とともにヴァラルアがこの国の末姫だということが分かった。

そこでさらに冷や汗が流れた。

あと少しでも力加減を間違えればヴァラルアは間違いなく真つ二つ

だつたに違いない。

そんなことになれば死刑は免れないだろう、なんせ服でこれだ。いや、服だからこそ・・・かな？

「半殺しの四肢切断で勘弁してやる」

それ、許すって言わない！

じりじりと距離を詰めて来る国王&メイド軍団。

こうなれば腹を括るしかないのか？

打開策浮かばず。もう駄目かと思つたそのとき、背後の壁をぶち破つた何かが俺の服の襟を掴んでそのまま引つ張つた。

ぐええ、首が絞まつてる！

「逃がすかあ！！」

国王の怒声がどんどん遠ざかりつつ、俺の意識もどんどん薄れていく。

これが比例・反比例の法則ですね・・・

お花畑が見えかけた辺りで俺は解放され、ゼーはーと息ついた。

「た、助かったが、掴むところをもう少し考えてほしかった。危うく天に召されてしまうところだった」

落ち着いてから助けてくれたであろう人物を見やる。

そこに居たのは先ほど剣を交えたヴァラルアその人だった。

そしてここは城から少し離れた屋敷の屋根の上。

服は先ほどとは違うが似たような皮鎧、その上に俺の服を羽織っている。

大剣は持っていないようだが、人一人抱えて屋根の上まで軽く飛び上がる身体能力には目を見張るものがある・・・ではなく

「なぜ、お前がここにいる」

そう、なんでこいつが俺を助けたのか理由が分からない。

俺の問いかけにヴァラルアは無言でジャラジャラと鳴る皮袋を差し出してきた。

たぶんこれは財布なのだろう。受け取って中を開けてみると金色のメダルがジャラジャラしてた。

「これは、国王が？」

俺の問いかけにヴァラルアはふるふると首を振った。

「じゃあ城から盗んできたとか？」

ふるふる

「このお金で俺を買うとか？」

ふるふる

「もしや君のお駄賃？」

こくこく

この金色メダルの山がお駄賃とか流石王族だ。

しばしあっけに取られているとヴァラルアは何かを言いたげにこちらをジーと見つめてきた。

このヴァラルアという少女、どこか円に近いものがある。

「一緒に旅に連れて行け・・・とか？」

こくこく

なんとなくだが言いたいことが分かってしまうのが複雑な気分だ。

「わかった、ここまできたらもう戻れないというか、下りれないし、一緒に行こう」

今戻ったら間違いなく国王に殺される。

憤怒した国王は本気を出した祖父に近いものを感じた。
あれは、殺る者の目だ。

「そっぴゃ荷物、城に置きっぱなしだったな・・・」

ため息混じりに城のある方を見やる。

捨てられはしないだろうが色々と惜しいものが詰まっていた。

「まあ、仕方ないか」

こうして俺とヴァルアは共に旅に出ることになった。

俺の黒歴史と兄の作り物（前書き）

ぶっちゃけ、話をどの方向に持ってきたいのかわからない。
まあ、コメディーだしどうでもいいか↑開き直り

俺の黒歴史と兄の作り物

城をでて分かったことだがここはクオルカンらしい。

まあ、人間が国王してる時点でクオルカンかマウケラスのどちらかだとは思っていたが……

俺たちは今、勇者一行が辿ったであろう軌跡を追いかけて亜人の王国ベルバンドに向かっている。

地図もばっちり、携帯食料も買い込んだ、傷薬も大丈夫。

ただしラルの武器は無い。

ラルとはヴァラルアのことだ。

長く呼びにくいため、屋根から下りた後本人の了解を経てそう呼んでいる。

そもそも、身長150前後の少女の二倍もある大剣など、持ち歩けるはずが無いのだ

ついでに言うと、剣を持たせると狂戦士化バーサーカーするので持たせられない。ただ、通常時のラルはとても良い子だ。

そう、スイッチさえ入らなければとても良い子なのだ。円と一緒に……

どういうことか？

簡単な話で、円はあれでトリガーハッピーなのだ。

ガスガンの改造品を両手に不良のバイクを蜂の巣にしたり、ナンパして来た男を再起不能にしたりと、苦労は絶えないが、それさえなければ円も良い子だ。

ちなみに、円の持つガスガンは兄が改造に改造を重ねた特別製リボルバー24発入り×2でBB弾（プラスチック製の弾）で厚さ5ミリの鉄板をぶち抜く。それも1メートル以上離れた位地からだ。

いくら自衛の為とはいえ、流石にやり過ぎな感じが否めないし、それを笑って容認する両親も両親だ。

おまけに、最終兵器とか言って兄が設計図から作り上げたオリジナ

ルガスガン・ジェノサイドとか言う名前の二丁拳銃は弾がパチンコに使われるそれで、コンクリートすら一発で粉碎する。

一度防弾チョッキ（どこからか兄が調達してきた）を着て喰らった事があるが、一週間ほど入院する羽目になった。病名は内臓破裂だ。一発って言ったのに10発近く射ち込んでくれるから………おかげで生死の境をさ迷った。

製作者の兄も流石に冷や汗を流してこう言っていた。

「我ながら恐ろしい物を作り上げてしまったようだ……」

恐ろしいじゃすまねえよ！

つと、思考が黒歴史へと走っていたようだ。

街道をテクテクと北へ向かって歩いていると、当然のように魔物に出くわした。

町の人話では街道には魔物避けの結界が張ってあるはずなのだが………

「きゅい〜」

魔物が鳴く。

魔物避けの結界が効かない魔物はかなり高位の魔物で何人もの精銳が束になって掛からなければ成らないような者ばかりだと聞いたが、目の前にいるのがそこまで凶悪な魔物なのだろうか？

見た感じ猫だ。

だが猫に角はないし背中に生えてる翼はドラゴンが持つようなものと酷似している。

そして何より小さい。

子猫程度の大きさしかないのだ。

「きゅい〜」

なんとも切なそうに鳴く魔物だが、魔物は魔物と気を引き締めて宗
近に手を・・・・・・・・

手を・・・・・・・・

・・・・・・・・

掛けられなかった。

何を隠そう俺は無類の猫好きなのだ。

猫になら何をされても笑って許せるほどに愛している。

むしろ愛して欲しい。

なんてことを以前呟いて妹にガチで引かれた。

俺は徐にポケットから携帯食料の干し肉を取り出して、猫もどきの
おもむろ
前でちらつかせて見る。

猫もどきはその干し肉に狙いを定めて・・・・・・・・飛び掛った。

うむ、猫だ。

この反応は間違いなく猫だ。

猫好きである俺が子猫？をこんなところに放置していくのも躊躇わ
れるため、その子猫を抱き上げて旅を再会した。

魔獣？いえ、ペットです（前書き）

今回は会話主体です。

もう完全にグダグダです。

平和って素晴らしい！！

魔獣？いえ、ペットです

俺とラルは街道の途中で出会ったドラねこ（ドラゴンねこ）を連れて次の街を目指した。

クオルカンからベルバンドまでの距離は直線にして約163キロ程度だが、途中迂回しなければならぬ場所や上り下りの激しい道なんかもあるため、街道にそって進むと200キロ以上かかる。

そんな距離を一日やそこらで行けるはずもなく、仕方ナシに点在する村や町で一夜を明かしながら進んでいくことになったのだが・・・

「あなた方が連れているそれは魔獣ですよね？」

「いえ、ペットです」

「どう見ても魔獣・猫龍まおろんにしか見えませんか？」

「どこをどう見ても猫です」

先ほどからこのようなやり取りが永遠に繰り返されている。

相手はこれから一夜を明かすために宿を探そうと思っている町で警備を任されている兵士さんだ。

頑なだなあ、猫だと言っているのに。

「そもそも猫には角も翼も無いでしょう！」

「きつと着飾りたかったただけなんだ！」

「着飾る云々の前に生えてますよ！ 動いてますよ！」

「そういう服なんです！　それか魔法です！」

俺らの言い争いが続く中、ラルはドラねこのミャオと遊んでいた。なんでそんな名前にしたか、それはこいつがメスだったからだ。

「あれを見て害を成す生き物だとしても言うのですか！」

「確かに猫龍が人に危害を加えたという報告はありませんが、それはそれです。魔獣は町には入れさせられません！」

「あんなに可愛いのに！　飼い主にただ尻尾を振るだけしか能が無い犬なんかよりもよっぽど可愛いのにダメと言うんですか！」

「可愛いのは認めますが、それより犬を馬鹿にすることは許しませんよ？　犬が尻尾を振るしか能が無いというのであれば、猫なんか気まぐれで何の役にも立たないじゃないですか」

「猫は気まぐれだからいいんだ！　あの気まぐれさが気高く高貴な雰囲気をもし出しているのが分からないとは、それに犬なんかよりもよっぽど滑らかな毛並は何物にも変えがたい物だろう！」

「犬の忠義心は騎士や兵士として見習うべきもので、師であり家族であり親友であり続けられる犬の素晴らしさが分からないとは！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうやら、決着をつけねば成らぬようだな犬派」

「受けて立ちましょう猫派」

俺と兵士の間に火花が散り、背後には猫と犬が見えていただろう。それほどまでに燃え上がっていた俺たちの決闘に水を指す事件が発生した。

「魔物の群れがこちらに向かってる、急ぎ西門前に集合しろ!!」

別の兵士が俺の前にいる兵士にそう告げて駆け足で別の兵のところへ向かった。

「・・・・・・・・一時休戦だ」

「・・・・仕方ありませんね、町を守るためです。強力してはもらえませんか？」

「それは任せろ、今夜寝る場所がなくなるのはこちらとしても困る」
俺たちはそう言って同時に西門へ向けて駆け出した。

たまには真面目な話してもいかが？

西門に着き、そこから見渡す草原の先に黒い何かがつこめいているのが分かる。

たぶんあれが全て魔物なのだろう。

「勇者様が魔王を倒しに行つてからだいぶ減つたが魔物の襲撃は本当に勘弁して欲しい」

俺の隣にいる兵士がため息交じりにそう呟いた。

守る側としては確かに勘弁して欲しいのだろう、なんせ数は3倍以上違うのだから。

つてかこれ、守りきれるのか？

魔物避けの外壁はあるにせよ、あの数で攻められたらひとたりも無いだろう。

「前回の襲撃は勇者様が居られたから凌ぎきれたが、今回はどうか・・・」

「なに？ 今勇者とか言つたか？」

「なんだ？」

「一つ教えてくれ、勇者と一緒に黒髪黒目の男は居なかったか？」

「ああ、大魔道師様のことがい？」

「大魔道師？」

思わず聞き返してしまった。

あの兄が大魔道師？

ぴったり過ぎる。

むしろ天職だろう。

「ああ、空から炎を纏った石をいくつも降らせたり、暴風に氷を混ぜたりと、今までに無い魔法をすさまじい勢いで使っておられたよ」

メテオストームにブリザードかよ、どんな大魔法連発してんだよ。

そんなことより、あの兄が魔法なんぞにはまり込んだのならそうなるだろう。

なんせ天才の名を欲しいままにするIQ300オーバー確定の化物だ。

あの頭の柔軟さと発想力＋知力は運動神経の悪さを補って余りある。一度ゲームプログラムを組んでいるところを目撃したが、右手と左手で別々のプログラムを組みながら音声入力ですらに別のプログラムを入力するような奴だ。

おまけにそれが一つのゲームプログラムというのだからそこが知れない。

兄は実家暮らしだが、趣味用に別アパートの一室を借りている。

そこに措かれている9台のパソコンは兄のお手製であり、全てがスーパーコンピューターと言っても差し支えない機能と処理能力を有する。

そんな兄が魔法。

もう勇者いらねえんじゃねえの？

つか魔王すら平伏してたりして。

そんな疑問が延々俺の頭の中を渦巻いていたが、隣の兵士に来るぞと声を掛けられはつと我に返る。

「ラル、ミヤオを抱えて外壁の上にも避難してろ」

ラルは今武器が無い、武器がなければラルはただの女の子だ。てか、絶対に武器は持たせない。持たせたら俺が危ない。流石に今回は力を出し惜しみしている場合じゃないな。

「初撃は俺がもらった！ 祖父直伝抜刀術七ノ型・断空鎌鼬！」

魔物の大群に向けて俺はその場から動かずに宗近を抜刀、それと同時に即座に鞘に戻す。

チンという音と共に先頭に居た魔物がぱつさと切り裂かれその場に崩れ落ちた。

それにぶつかつた魔物が勢いを落とし、そこに後ろから来た魔物がぶつかり統制は一気に崩れた。

なんというか、やはりこれも威力がおかしい。

地球ではせいぜい50メートル離れた位置から木の幹に傷跡をつける程度しかできなかったのだが……

フム、今はそんなことはどうでもいいか。

俺が気を取り直して第二波を放とうとしたとき、俺の右ポケットからバ。プの天。観。が流れた。

く、こんなときに一体誰だ！

ポケットから携帯を取り出して通話ボタンを押す。

「はいもしも『ヤミい！昨日からどこほつつき歩いてんだ！！今日の夕飯作りはヤミの番だろうが！！ さっさと帰って来い！！』」

この罵声、我が妹鈴音に間違いないだろう。

「鈴音か！ 落ち着いてよく聞け、今兄を迎えに異世界？だか何だかに来ててしば「グオオオオオオオオオオオオオオオオオ」」

『ああ！？ 何、なんて言った！？ っつかうるせーんだよ！！』

電話をしている間にこちらの先頭に立つ兵士たちとぶつかったらしく激しい戦闘音が響いてきた。

「後で掛けなおす！！」

俺はそれだけ言って電話を切った。

宗近に手を掛け、久しく出していなかった全力を出して魔物の軍勢にぶつかった。

シリアスなスパイスなどはご入用で？（前書き）

今回は門音視点ではなく双子の鈴音ちゃん視点だったりします。
ぶっちゃけ、だいぶ偉そうに双子について豪語してますが正確なこ
とは定かじゃないです。
決して本気にしないでください。

シリアスなスパイスなどはご入用で？

読者の皆様、双子には不思議な力があることはご存知だろうか？

特に一卵性双生児はほぼ同一の遺伝子を持つことから科学的には解明できない不思議な力があるとされる。

例えば、双子のうちどちらかが大怪我をして手術を受けなければならなくなった場合、怪我をしていない方の子供まで痛みを訴えたり、引き離された時など、どこにいるかなどがなんとなく分かったりと、なぜと聞かれてもなんとなくしか答えられないあいまいながらも確実に通じる何かがある。

これは双子全部がそうかと聞かれればそうでもないが、確実にそういった能力をもつ双子がいることも確かだ。

各言う門音と鈴音の二人もこの不思議な力の持ち主だったりする。

過去に鈴音が誘拐されるという事件にあったとき、真っ先にその誘拐先を突き止め、助け出したのが門音だった。

逆もまた然りで、二人はどちらかがどこにいるのか、なんとなく分かるのだ。

他にも近くにいれば互いの心理状態や体調良し悪しも分かる。

そんな深い繋がりのある鈴音と門音なのだが、現在門音の居場所がまったく良いいほどに分からない。そのことに言いようの無い不安を覚える鈴音だが、性格上それを素直に口に出せないでいる。電話を掛け、無事に繋がり後で掛けなおすとまで言われたが、それでも不安は拭えない。

なぜだろうか、とても良くない感じがする

夕飯は仕方ないからと鈴音が作ったし、上二人が居なくなっただからと言ってうるたえる様な両親ではないから割といつも通りの食卓だったが、鈴音の表情は優れなかった。

それは、ちょうどあたしがお風呂に入っているときに起こった。
左腹部と右胸に貫かれるような痛みが走った。

一瞬のことだったが、冷や汗が滝のように流れるのが分かった。
そして、その痛みと一緒に見えた景色。

異形の化物が目の前で崩れ落ちるのと、自分の胸と腹から突き出た
鋭い何か。

痛みが走ったのと同じ場所である。

おまけに、今まで繋がっていた糸が切れたような感覚あり門音を感じ
られなくなった。

そう、まるで門音が事切れてしまったかのような……..
そこまで考えて思った、今の門音の目線？

ともすれば先ほどの痛みは門音が実際に貫かれたのではないか？
もしそうならば助かる見込みはほぼゼロだろう。

一瞬だったが見えた景色にはまだまだ五萬と化物が蠢いていた。

あたしはお風呂から飛び出してすぐさま部屋に戻り門音の携帯に電
話を掛けた。

しかし繋がらない。

何度も何度も繰り返し繰り返しコールするが、必留守番電話サービ
スに繋がってしまう。

10回を越えた辺りであたしは電話を掛けるのをやめた。
なんとなく、分かってしまったのだ。

長年共にあった半身が失われた感覚に……..
そんなあたしの様子に、同室の円が心配そうな顔で見つめてくる。

あたしは年甲斐もなく円に抱きついて、泣き声を上げないように堪
えながら呟いた。

「門音が……..死んじやった……..」

シリアスなスパイスなどはご入用で？（後書き）

ネタバレします、主人公死んでません。

ぶっちゃけ死んじゃったら物語り終わるって

まあ、瀕死であることには変わりないんですがね……………
つつか、この先どうしよう。まったく考えてないや。

甘味なデザートでお口直しでも。(前書き)

今回はあまあまです。

誰と誰がとかは言いません。

だってねえ・・・

甘味なデザートでお口直しでも。

どうにか魔物の軍勢を退けたことを確認した俺はすぐさまその場に崩れ落ちた。

どうやら血を流しすぎたらしい。

当たり前か、左腹部と右胸を魔獣の触手に貫かれた上、袈裟懸けにばっさりと切られているのだ。

むしろよく動いていたと思う。

最後の最後まで俺の近くで戦いぬいた犬派の兵士が必死に何かを叫んでいるが俺の耳には届かなかった。

きっと届いていたのだろうが理解できるほどに頭に血が回っていなかったのだろう。

フェードアウトしていく視界の端でミヤオがこちらに走ってくるのが見えた。

いつの間にか俺は真っ暗な空間に居た。

もしかここは死後の世界か？

などという考えが浮かんだが、自分から伸びる細い糸のようなものがあるのに気づき、とりあえずそれを辿ってみる事にした。

辿っていく途中、今にも切れてしまいそうな状態になっている場所があり、大丈夫かなと俺が手を伸ばすとたちまち直ってしまった。

そんなことを何度か繰り返しながら進んでいくと、不意に視界が開けた。

見覚えのある場所、ここは俺と兄の部屋だ。

その俺たちの部屋の、しかも俺のベッドの上には驚くことに鈴音が眠っていた。

臉が赤く腫れ上がり、頬には涙の後が見て取れる。

泣いていたのか……

そこではたと気づく。

俺から出ている系はそのまま鈴音に繋がっているのだ。

もしやこれは……

俺がそう考えたとき、寝ている鈴音が「門音え……」と呟いた。

鈴音が俺の名前を呼ぶのは珍しい、よほどのことがない限り決してその名前では呼ばない。

そんな鈴音を愛おしく（家族的かつ妹的な意味で）思い、そつとその頭を撫でようと手を伸ばす。

しかし、俺の手は鈴音の頭に触れることなくすり抜けてしまった。

そして、ここまで近づいて鈴音がなぜ泣いていたのかを知った。

悲しみに暮れる鈴音の心の中に俺が居たのだ。

正確には何かに貫かれて命を絶った俺が。

もしかなくてもあの時のことが鈴音にも伝わっていたのではないか？

鈴音がさらわれてセクハラをされたときに、俺の体にも触られた感触と悪寒が走ったように。

見ている夢の内容までは分からないが、この分だと良い夢ではないだろうと俺は鈴音を起こすように呼びかけた。

すると、鈴音はゆっくりとだが瞼を開いた。

「あれ、あたし……そつか、門音が死んで、それで……」

『鈴音鈴音』

「あれ、おかしいな……幻聴まで聞こえる」

『幻聴じゃないからこつち向け』

俺の必死に呼びかけに鈴音がこちらに顔を向ける。
そして驚愕の表情で叫んだ。

「門音!？」

『そつだよ、心配かけたみたいでごめんな』

「ほ、本当に門音なのね？」

『疑り深いなあ、俺以外に何だって言うんだよ』

「だ、だって門音、お腹と胸を貫かれて……………」

『鈴音、よく見る』

そこで気づいたようで、鈴音はベッドの上を這いずって俺の近くまで来て、そのまま手を伸ばし……………

俺の頬を叩く様に手を振った。

しかし、その手が俺に当たることはなかった。

「透けてる……………」

『普通は叩かないよね、当たったらどうするつもりだったんだよ』

ため息交じり呟く俺とは対照的に鈴音は今にも泣きそうだった。

『え、あれ、鈴音、どうした?』

「門音え、あたしを置いて逝かないで、あたしを一人にしないでよ
お・・・・・・・・」

その言葉に俺は息を呑んだ。

生まれてからずっと、どこかで感じて居た存在が失われるというのはどれほどの衝撃なのだろうか・・・・・・・・

布団をぎゅっと握り締めて今にも泣きそうな顔で俺を見つめる鈴音に、俺は安心させるようにできるだけ優しい声で囁いた。

『大丈夫、お前を置いて逝くなんてことはしない。必ずお前の傍に居る』

「約束・・・・・・・・だからね、お兄ちゃん」

鈴音にそんな呼ばれ方をするなんて思っていなかった俺は柄にもなく動揺していただろう。

そんな時、引っ張られるような感覚がして俺の体がどんどんその色を失っていく。

『鈴音、どうやらそろそろ体に戻らなきゃいかんらしい』

「うん、ちゃんと返って来いよ」

どうやらいつもの調子を取り戻したようだ。

『ああ、それまで家のことは任せたぞ』

お互いに頷きあったそのとき、俺と鈴音をつなぐ糸がその存在を主張するかのように輝きと太さを増した。
そんな気がした。

けど、それ確かめる時間もなく俺の意識は暗転した。

甘味なデザートでお口直しでも。（後書き）

まあ、しょうがないと思うよ？

だって双子だし、半身だし、あれだけの傷負った場面見せられたら普通死んだと思うわけだし、何気に鈴音ちゃん好きだし、悲しみに暮れるとかマジありえないと思うわけで、どうにか持ち直す方向で考えてたら偉いことになってしまった。

というわけで次の話しは異世界に戻ります。

→どういう訳だって突っ込みは無しで

とりあえず、体が痛いです（前書き）

何だかラルちゃんに気が空です。

意外とミヤオが活発で困る・・・

とりあえず、体が痛いです

スースーと聞こえる寝息に俺はゆっくりと目を覚ました。
どうやら元の体に戻ったらしい。

左腹部と右胸部がおかしいほどの痛みを訴えている。

あ、やべえ、これ、死ぬかも……

俺が痛みに意識を再度どこかへ飛ばそうとしていると、もぞもぞと動く何かがそのまま顔に落ちてきた。

「ふぶつ」

「きゅい」

必死に顔を動かして落ちてきた何かを退かす。

転げ落ちるように俺の顔の上から落ちたミヤオが嬉しそうに鳴き声を上げながら俺の顔を舐める。

ざらついた舌が鑢みたいで地味に痛いけど微笑ましいし、何より猫だから許す。

ミヤオがきゅいきゅいと騒いでいると、俺の胸の辺りで何か動いた。ミヤオから視線をはずしてそちらに顔を向けると、ぼんやりとした表情のラルがこちらをジーっと見ていた。

言いたいことはなんとなく分かる。

だって目が赤い。

「心配かけてごめんな」

左手を動かしてラルの頭を撫でると、気持ち良さそうに目を細める。こいつ、猫みてえだな。

猫耳とかつけたら似合いそうだからと若干危ない方向に思考が走っ

ていたところでラルが再び俺を枕にするように頭を預けてきた。
ご丁寧に心臓付近に頭を乗せて鼓動が聞こえるような体勢を取っている。

そのままスースーと寝息を立て始めた。

どうやら真夜中らしい、昼間なら聞こえるはずの活気ある声がまったく聞こえないのだ。

ならばと俺も再び眠りにつくことにした。

ラルとミヤオの顔を見たらなんだが痛みもさほど気にならなくなつたしな。

次に俺が目覚めると、ラルとミヤオの他に、見慣れぬ顔の男が居た。

「お、ようやくお目覚めか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・誰だ？」

俺がその男に向かってそう言うと、男はショックを受けたような顔で

「おいおい、いくら3日も寝てたからと言ってライバルの顔を忘れてもらっちゃ困るぜ、猫派」

と、言い返してきた。

そつか、俺は3日も寝てたのか。

それにこいつ、今俺のことを猫派とか呼びやがったよな？

「お前、もしかして犬派の兵士か？」

「うん、まあ間違っちゃいないが今日は非番だ」

だから兵士じゃないさ、といけしゃあしゃあと言った。

最初に会ったときはヘルムを被っていたから分からなかったが、私服姿でいるこいつは整った顔立ちをしていた。ぞくに言うイケメンである。

「・・・・・・イケメンなど滅びてしまえ」

恨みの籠った声で呟いたがどうやら聞こえなかったらしい。
いや、あえて無視しやがったなこいつ

「つと、お前が意識取り戻したら声掛けるように言われててからちよいとセンセの所行ってくるわ」

「ああ、わかった。ってか口調ちがくねえか？」

「こつちが素だ。兵士つてのは得てしてめんどくせーもんなんだよ」

なるほど、公務員みたいなものか。

犬派の兵士はさっさと部屋を出て行ってしまい、部屋に残されたのは俺とラルとミヤオ。

ラルはというと、座った椅子の上でミヤオを抱えたまま先ほどからジーと俺の顔を眺めている。

そんなに俺の顔って見てて面白いのか？

「なあ、俺の顔なんか眺めてて面白いかな？」

俺の問いにラルはコクコクと頷いた。

それに合わせてミヤオもコクコクと首を動かしているのがなんとも

可愛い。

ラルとミヤオで和んでいると部屋の戸が開けられ、入ってきたのは白衣の女の人だった。

「おっと、随分元気そうじゃないかい」

白衣の女性（犬派が言っていた先生だろう）が、ツカツカとベッドの脇まで来ると、

「ちよいと失礼」

と言って俺の着ていた服をはだけた。

「ふむ、手当ての経過概ね良好って所かね。おっと、まだ動くんじやあないよ、傷は塞がっても失った血液までは戻らないからね」

触れて来た女医さんの手は俺の体より幾分か温かった。

鍛錬をしよう！（前書き）

コメディ要素がない！！

つつか、今更だけどコメディってどうすればいいの???

鍛錬をしよう！

一週間の養生のあと、やっと外出許可をもらえた俺は町外れの空き地に来ていた。

鈍った体をほぐすように念入りに柔軟体操をして体を温めた後、宗近に手を掛ける。

それから目を瞑り、どう宗近を振るうかイメージをする。

肩幅に開いた足を軽く曲げ、腰を落として重心を下げる。

イメージした通りにゆっくりと宗近を動かし、体中の感覚を確かめる。

それから宗近を鞘に戻し、体勢を直立に戻す。
それから先ほど行なった動作を瞬時に行なう。

「久我流抜刀術一ノ型・金失せ」

抜刀術は如何に脱力できるか、如何に力を込められるかで威力が決まる。

脱力から抜刀時の強張りまでの差が大きければ大きいほどに鋭さ、威力が増す。

抜刀術とは、早く振れば鋭さ、切れ味が増す刀の特性を最大限に活かすために考案された方法だと祖父に教わったが、嘘百八も正しい所であった。

だが、確かに祖父の言うとおりに特性は最大限に活かしているだろう。

ただ、それゆえに体への負担も大きく、少しでも体に違和感を感じたりしたら即座に鍛錬を中止しろというのが祖父の口癖だ。

今はそれを確かめる上でも一つ一つ型を確認している。

先ほどと同じように肩幅に足を開き、膝を曲げ腰を落として重心を下げる。

そこから宗近をゆつくりと引き抜いて真横に振りぬいてから刃を返して斜めに振るう。

カタカナのフの字を書くような動きで宗近を振るい、そのまま鞘へ戻す。

直立の状態に姿勢を戻し、そこから瞬時に先の型をなぞる。

「久我流拔刀術二ノ型・反し刃」

技名と型を確認しつつ、体を慣らしていく。

垂直に立ったまま逆手で宗近を握り、真上に振りぬく。

「久我流拔刀術三ノ型・逆撫さかなで」

左足にのみ体重をかけ、抜刀する勢いを利用して一回転する。

「久我流拔刀術四ノ型・遍断あまねだち」

逆手で掴んだ宗近を抜刀、その際に発生する真空波にさらに直角に刃を入れる。

「久我流拔刀術五ノ型・残空ざんくう十文字じゅうもんじ」

直立の体勢から垂直に宗近を抜刀し、大きな半円を描く。

「久我流拔刀術六ノ型・暗夜一閃」

重心を落とした体勢で宗近を地面と平行に抜刀し前方全てを薙ぐ。

「久我流拔刀術七ノ型・断空だんくう鎌鼬かまたち」

一通り型を終え、一息ついたところで視線を感じた。
そちらに顔を向けると女医さん、犬派、ラル＆ミャオが居た。

「いやいや、見事なものだね。しかしながら病み上がりの身としては褒められたことではないわね」

「東国の武器つて折れ易いつて聞いてたけど、なるほど……
使おうってことか」

ジ……………

「きゅいきゅいきゅいっ」

それぞれ色々と言ってくれるのだが、

「居るのならば声を掛けてくださいよ、見世物にされるのは好きじゃないんです」

流石に恩を仇で返すような真似はしない。
できるだけ丁寧な言葉遣いで、しかしながら自分が嫌だとは思うことはしっかりと拒否する。

「ははは、医者として患者の健康状態を管理するのも仕事のうちだからな、我慢しろ」

豪快に笑いながら背を向けて歩き出す女医さんだが、あれで何百年と生きる魔女だそうだ。
どう見ても20代前半の女性にしか見えないが、なんとも不思議な世界だと実感した。

鍛錬をしよう！（後書き）

笑いを私に！！

どうやったら笑える文章が作れるのかわからない・・・。

とりあえず、思いつくままに勢いで書いていけば面白くなるかな？
？

今更だけど硬貨について

魔女とは基本的、我儉な種族だという。

「は？ 今なんていいました？」

「なんだい、その年でボケちまったのか？」

「いえ、そうではなくて……」

各言つこの女医さんも魔女な訳で。

「だから、入院費等その他もろもろ占めて10万セルだつつてんの」

セル、この世界の通貨名称で鉄貨1枚1セル。

銅貨が1枚が10セル、銀貨が100セル、金貨が1,000セル。さらにこの上に白金貨という物が存在し、これ一枚で100,000セルというふざけた高価だ。

慎ましく過ごせば一般庶民（四人家族）が一月（35日）生活するのに大体銀貨7〜8枚で足りる。

贅沢をするにしても金貨1枚あれば十分だろう。

この世界には土地代やら保険料やは存在しないのだ。もちろん税は存在するが、それもそこまで酷くない。おまけに学校という概念が無い。いや、あるにはあるが魔法学校なのだ。

入学費などが馬鹿高く、貴族くらいしか入学できないと来た。

因みに1セル＝120円位だろう。

なんと大雑把な、とは思ったがよくよく考えてみれば日本が細かいのさ。

だって考えてみてくれ、硬貨が何種、札が何種あるか数えてみてくれ。

1円、5円、10円、50円、100円、500円、これだけで6種類、さらに札で1,000円、5,000円、10,000円と追加3種で合計9種類、以前存在した2,000円札（今は消えたが）が入れば計10種だ。

そんなものが全て純鉄、純金なんかで用意したらそれだけで重くて動けなくなるし、何より邪魔だ。

紙は存在するが、技術の発達していないこの時代からしてみれば紙は高級品なのだ。

そんな物をいつ破られるか分からないお札などという物にしようという考えなど浮かぶはずが無い。

さて、現実逃避もここまでにしよう。

俺たちの手持ちは今、金貨39枚と銀貨2枚、銅貨が5枚の鉄貨7枚だ。

本当は40枚あったのだが、色々と旅路に必要なものを買い込んだらこうなった。

女医さんの言う100,000セルまであと金貨61枚ほど足りない。

そもそもが法外な治療費を取る医師として有名だったらしいが（腕は折り紙吐きだが）、ここまで法外な額を吹っかけてくるとは流石に予想外だ。

というか、ラルがおこずかいとしてそんな馬鹿げた額もらったことにもビックリだが……

だって金貨1枚1,000セル＝120,000円だぜ？

それが40枚あるとか普通に500万円近い額ってことだぜ？

ラルが言うには一月金貨1枚しかもらってないとか言うが、それでも一家族の一月の生活費より高いってなんの冗談？って言いたくなる。

しかし、そんなラルの財産おしずかいを持ってしても足りない治療費を請求さ

れて俺ははたはた困っていた。

犬派が講義の声を上げたが、女医さんに口論で負けて部屋の隅でいじけてしまった。

「ふむ、払えないならば別のもので支払ってくれてもいい」

どうしようかと悩む俺らを見て女医さんがそう持ちかけてきた。

そのとき、女医さんがニヤリと微笑んだのは見なかったことにしよう。

「俺らで払えるものならば・・・」

引け腰になりながらもそういうと、女医さんはとんでもない事を口にした。

「そうだね、まずはその太刀。見たところ相当な物だろうからね10万セルなんで目じゃないだろう」

「次に、少年あんた自身だ。なかなかいい男だし持つてる医療知識も興味深いからね、あたしの13人目の夫にしたげるよ」

「んで最後に」

女医さんがそう言いかけたところで部屋の戸が開けられ元気な声と共に何物かが飛び込んできた。

「ちょっとママ、これ見て！」

この世界に来てこの上ない衝撃を受けた瞬間だった。

厄介ことの予感（前書き）

コメディーどこいった・・・

あれえゝおかしいな、こんな予定じゃなかったのに、いつの間にか
ら割かし真面目なファンタジー化してる・・・。

厄介ことの予感

とりあえず今言われたことを整理しようか。

まず刀を置いていけ、これは無理だ。

宗近は我が家の家宝であり、今のところこの世界では唯一俺が信頼を置ける相棒だ。

次に俺自身、これも不可能だ。

気に入ってもらえたことや、かつこいいと言われたことは嬉しいが俺には兄を迎えに行くという使命がある。おまけに軽く流してしまつたが13人目の夫つて未亡人とかそんな次元ではない。

そして最後にこの女医さんに向かってママと呼んだ少女だ。

年齢的には俺と同じくらいか、少し年下だろう。

どう見ても少し歳の離れた姉妹にしか見えない。

人間、頭では理解してても納得できないことというのはいくらでもある。

目の前の状況はまさにそうだった。

「なんだいシュイ、こちとら今は仕事中だつてのが分からないのかい？」

「それどころじゃないの！　これを見て！」

そう言つてシュイと呼ばれた少女が鞆から取り出したのは花の蕾だった。

それを見た女医さんが傍目に分かるほど動揺を表した。

「シュイ、これをどこで？」

「この街から西に3日ほど進んだルドラ溪谷の谷底に、私じゃどう

にも成らないほどに群生してた」

「それは非常に不味いな、完全に絶滅したと思っていたからここには対処薬が無い……」

ことの成り行きを見守っていた俺だが流石にただ事ではなさそうなので会話に割り込む。

「あの、その花がどうかしたんですか？」

「ん、知らんのか？ いや、知らなくても不思議ではないか。この花はイビルズホワイト、別名を魔女殺し草というんだ。」

「魔女殺し草だって!？」

今の今まで部屋の隅でいじけていた犬派が噛み付かんばかりの勢いで迫ってきた。

それでも首を傾げる俺とラルに犬派が懇切丁寧に説明してくれた。

「魔女殺し草は猛毒草なんだ。一つの花から取れる毒液の量はおおよそスプーン一杯分、たった其れだけの量ですら街一つが壊滅する。性質が悪いことに普通に風に舞う花粉ですら吸い込めば一晩で命を落とす。抽出された毒液を口にすれば即死だ」

「花粉の方ならば一応治療薬はあるものの特別な製法を用いるために値段が高く、おまけにウィッチの隠れ里でしか作られないの」

「名前の由来は毒に対して強い耐性を持つ魔女ですら死に至らしめることからついた。80年ほど前に三力国で同時に駆除を行い、絶滅したとばかり思っていたのだな」

犬派に便乗してシユイという少女と女医さんも説明してくれたが、分かったことは一つだけだった。

「大変じゃないですか！」

「だから、さつきからそう言ってるでしょ！ イビルズホワイトは魔術に強い耐性を持つてるから魔法で焼き尽くそうにもできないのよ。数が少なければどうにかなるけど、群生してたらそれだけで魔術障壁を張ってるのと同じ効果があつて魔女じゃ近づくこともできないの」

悔しそうにするシユイと真剣に何かを考えている女医さん。

そして真直ぐにこちらを見て口を開く。

その時点で物凄く厄介ことの気配を感じ、できるならば断ろうと思っていた。

「君に頼みがある。拒否権はないと思ってくれ」

しかしながら先手を打たれてしまった。

既に頼みじゃねーよと突っ込みたいが我慢する。

「なんでしょうか？」

「うちの娘、シユイと一緒にウィッチの隠れ里へ行きイビルズホワイトが生息していたことを至急伝えてきてくれ。それと解毒薬をできるだけ早く持ち帰って欲しい」

「………分かりました」

「あたしはここから離れられないからね。街を守る結果を張らなきゃならんし、唯一の医師が居なくなったら大変だろ？」

俺の物言いたげな視線を受けてサラリと切り返してくる辺り、この人にはとても勝てそうには無いと思った。

厄介ことの予感（後書き）

勢い任せで新キャラシユイちゃん出しましたが鈴音とキャラ被りそ
う・・・・・・・・

男の子の部屋は漁るべからず！（前書き）

そろそろ作品ジャンルをコメディーからファンタジーに変えた方が
いいような気がする今日この頃。

男の子の部屋は漁るべからず！

街を発ってから早三日目となるが、俺の疲労が半端じゃない。なんせ、うじゃうじゃと魔物は出てくるのに戦えるのが俺しか居ないという。

ラルは武器が無い&持たせたら危険と言う理由から戦闘には非参加。女医さんの娘だと言うシユイは戦闘はからっきしなのだ。本人いわく

「私は将来ママの後を継いで医師になるから攻撃魔法は必要ないの！」

とのことらしいが、魔物をみてビビッてる辺り本音は知れている。さて、そんな非戦闘メンバーしかいないパーティーで旅をすれば役割は決まってくる。

唯一戦闘のできる俺の場合。

1日の半分は戦闘時間、寝ずの番、食料の調達・・・e t c

ラル&ミヤオの場合

癒し系、見て和む

シユイの場合

怪我の治療、料理

明らかに俺の負担がおかしい。

抜刀術は初撃必殺が基本だ。

それなのに何匹もの魔物魔獣を相手にしなければならなくなると、その強さは半減どころか一割にも満たなくなる。

何が言いたいかというと、割と満身創痍である。

「ほらほら、ぐずぐずしないでチャキチャキ歩く！」

元気良く先頭を歩くシユイ、その後ろを頭にミヤオを載せたラルがひよこひよこ着いていく。

そこから数歩遅れて俺がヘトヘトになりながら歩いているわけだ。現代人の体力の無さを痛感する。

割と体力には自信があつたのだが、この世界に来てそれすらも打ち碎かれる。

全力で走ってるのにシユイにすら負けるのだ。

「ちょっと俺にも休憩をさせろ、街を出てから一睡もしてないんだぞ………」

「大丈夫よ、人間たかだか2、3日寝なくても死なないわ。それに飯にも男でしょ？それくらい我慢しなさい」

だいぶ無茶を言う。

抜刀術は脱力と緊張を繰り返すから体への負担はかなり大きい、さらには集中力も凄まじく疲弊した精神を休ませるためにも睡眠は必要不可欠だ。

「馬鹿いえ、そういうのは実際に魔物と戦ってから言えつての」

悪態を吐いたがシユイには聞こえなかったらしくどんどん進んで行ってしまう。

仕方ないからと俺も疲れた体に鞭打って二人を追いかけた。

んで、川が近くにあると言うことで少し早いがそこで昼食をとることにした。

「悪いが少し寝かせてもらっわ、できたら起こして」

自分の役割である飲み水の確保と魚の吊り上げをさっさと済ませた俺は、近場の木に背を預けて意識を飛ばした。

「あらヤミ、どうしたのよ」

ん？ なにやら鈴音の声が聞こえる。

「ちょっと、無視してんじゃないわよ」

声のする方に向き直ると、下着姿の鈴音が髪をわしゃわしゃと拭きながらこともなげにこちらを見ていた。

『・・・・・・・・とりあえず服を着ようか、話はそれからだ』

半身であり、生まれてからずっと一緒だった妹の半裸なぞ見てもなんとも思わないさ。

逆もまた然りだということをここに宣言しておこう。

なぜなら、俺が風呂中に気に食わないことが会ったからと俺を締め上げに来るくらいだ。

閑話休題

「で、ヤミ、なんかあったの？」

現在鈴音は俺と兄の部屋を自室として使っているらしい。
そのため、色々と隠していた俺のお宝は全て廃棄されてしまっていた。

『なんかつてなにが？』

「とぼけんじゃないわよ、ラルちゃんやシュイの事よ」

『………なんで鈴音が二人のことを知ってるんだ……』

「どうやらね、こつちとそつちじゃ時間の流れが半日ほど違うみたいでね、あたしがレム睡眠のときに視界とあんたと共有するみたいなの」

俺は理解ができずに「レム睡眠？」と首をかしげているとため息を吐いて徐にハリセンを取り出した。

「このお馬鹿！！」

バシーンと小気味よい音と共に俺は部屋の床に沈んだ。

『いてえ、つつか何で今殴れた！？』

地球での俺は零体扱いになるから普通では触ることなどできない、むしろ見えているのは家族の中じゃ鈴音しかない。

それなのになぜ今殴ることができたのかのた不思議でたまらない。

「簡単なことよ、お経をびっしりと書き込んでやったのよ」

・・・幽霊にお経とは安直な、しかしながら効果は抜群だったぜ・・・
痛む頭を擦り、とりあえず体性を元に戻しながら鈴音に言う。

「まあ要するに鈴音は眠るところのことが見れると、そして今地球は深夜0時であると」

「・・・まあ、それでいいわ。言いたいことは色々あるけれど・・・で、何かあったわけ？」

「いや、そういうわけじゃなくて単に疲れたから仮眠を取ろうとしたらこうなった」

「条件は同じはずなのよね、と言うことはあんた今まで寝てなかったんじゃないの？ それかレム睡眠に入らないのか・・・」

確かに寝ていなかったし、そもそも眠ったとしても夢を見るほどに深く眠ることも無い。

祖父と巡った戦争国家諸国はいっつ襲撃にあうか分かったものではなかったため、自然と眠りは浅くなる。

そのせいなのか分からないが、もう何年も夢を見ていない。

「たぶん、両方かと・・・」

「・・・」

無言で睨みつけてくる。

鈴音は俺が夏休みに祖父に連れ歩かれていることを知らない。
合宿だとして祖父は言わなかったから。

「あたしはもう、何も言わないわ。これから寝るから邪魔しないでね」

ため息を吐いてさっさと元俺のベッドに潜り込んでしまった鈴音が思い出したかのようにボソリと呟いた。

「そうそう、ベッドマットの下にまでエロ本隠すのやめなさいよね。いくら『自主規制』で『自主規制』な『自主規制』の内容だとしてもあたしは軽蔑はするけど見捨てないから」

この後、俺のスクリーンを上げ鈴音にシバキ倒されたのは言うまでも無い。

男の子の部屋は漁るべからず！（後書き）

はい、ありがちありがち。

えっちい本の隠し場所なんて結局たかが知れてるんですよね。

隠せていると思ってる時点で浅はかと言うことだとか、なんかの本でも書いてありましたしね。

え、私はそんな本持っていないですよ。

興味が無いかって？

黙秘権です。

膝枕って寝心地がいいのはなぜだろうか？（前書き）

ご報告です。

ジャンルをコメディーからファンタジーへと変更しました。
どうやら私にコメディーは向いていないようです。

膝枕って寝心地がいいのはなぜだろうか？

眠りから目が覚めて見ると、辺りは既にオレンジ色に染まっていた。

「あ、やっと起きたわね」

俺の顔を覗き込むようにして呟いたのはシュイだった。

しかし顔の位置がおかしい。

俺は確か木に背を預けて眠ったはずだ。

それがなぜ、視線の先に赤く染まる夕焼け空が目に入るのか……

「まったく、ビックリさせないでよね」

彼女はそういうと握っていた俺の左腕から手を離れた。

「どういうことだ？」

俺が意味が分からず問いかけると、シュイはできの悪い兄弟に説明でもするかのように話し始めた。

「ご飯ができたからあんたを起こそうとしたんだけどね、いくら揺すっても起きないから頬でもつねねば起きるかなって思ってた。触れてビックリ、血が通ってないんじゃないかってくらいに冷たいんだもん。慌てて脈を測ってみたら普通の三分の一しかないし、ここには薬も無いから対処もできないし、どうしようかと思ったのよ」

確かに、それは悪いことをしたらしい。

「そうだったのか。悪いな、心配かけて」

「そう思うならあなたのお連れさんにもしっかり謝ることね」

そう言われてから始めて頭が地面についていないことに気がついた。頭を動かして上を見ると、そこには無表情ながらも安心したような瞳をしているラルが居た。

「……これは、世に言う膝枕とか言う奴では？」

俺が自分の状態を把握しようと頭をフル回転させていると、面白い玩具でも見つけたようなニンマリとした笑顔をしたシユイが

「あんたって小さい子が好きだったの？ 人の趣味をとにかく言うつもりはないけど……」

と明らかに分かりきっているのにそう聞いてきた。

「ちょ、おま！ 誤解だから！」

「えゝ、でもでも、そんな姿見せられたらねえゝ……疑わざるえないじゃない？」

「くっ！ 反論できねえ！」

とりあえず、この姿勢は不味いということで起き上がったが、その頭をラルに押さえつけられて動くに動けなくなった。

「な、ラル！？」

俺が驚いて声を上げるも、ラルは手を離そうとしない。

そこへ、どこにいたのかキュイが嬉しそうな声を上げながら人のお

腹の上にダイブしてきた。

「ふぐえ！」

「キュイキュイキュ」

飛び乗られたことで悶えている俺に、シュイはさらに追い討ちをかけてくる。

「ま、このことは誰にも言わないで上げるから、今はゆっくり休んでなさいな。あんた相当疲れ溜まってるんでしょから」

流石にこの3日の疲れはそう簡単に取り除くものではないらしく、全身に気だるさが残っている。

「激しく誤解をしているが俺はロリコンじゃないが、お言葉に甘えて休ませてもらうよ」

「ろりこん？ 意味は分からないけどオヤスミね、夕飯ができたら起こすから、今度ちゃんとおきなさいよ」

返事もそこそこに、俺は再び瞼を閉じて体を休ませることにした。

膝枕って寝心地がいいのはなぜだろうか？（後書き）

実際、膝枕なんてされたこと無いから寝心地がいいのかよく分かりませんが、そう聞くことが多いのでたぶんそうなのでしょう。
うらやましいなあチクシヨウ！！

ある朝の一時

翌日、日が昇る前に目覚めた俺はなぜか、左右の腕にしがみついて寝ている二人をどうしようかと悩みぬいた末に、そつと腕を抜くことにした。

しかしながら分らないのだが、なぜこの二人は俺にしがみ付いているのだろうか。

寒かったつてのは理由にならないだろう。

などと考えている内に、無事に脱出することができたので二人を起こさないようにそつとその場を離れ、近くの川で顔を洗い、朝の澄んだ空気を肺一杯に吸い込む。

地平線の彼方では太陽が夜の闇を照らし、闇夜は逃げるようにその色を薄めている。

二つの交じり合う地点では青とも紫ともつかないなんとも不思議な色合いをかもし出していて、柄にもなく、そんな不思議な空に見入っていた。

「確か、朝と夜の交じり合った空をマジカルアワーとか言ったな」

何をするでもなく、ただただその空を眺めていた俺は、日が完全に昇りきったところで視線を感じた。

空から目線をずらし二人が寝ていた方へと向けると、いつ起きだしたのか、セラとシュイが俺の方をジッと見つめていた。

「どうした？」

俺が問いかけると、シュイは慌てて目線を逸らし、なんでもないと行って川辺に顔を洗いに行ってしまった。

セラはというと、こちらをジッと見つめたままだが、その手をこっ

ちに伸ばしている。

そんな姿が妙に笑えて、クスッと笑ってからセラの所まで近づいた。俺がセラの手の届く範囲まで近づくと、セラはそのまま俺に飛びつき、ギューッと力強く抱きしめてくる。

普段はそれだけなのだが、今日は珍しく言葉を発した。

「…………お兄ちゃん」

これ程までに近い距離に居ても聞き取るのがやつとの声だが、俺はしっかりとその声に含まれた感情を読み取ることができた。寂しかったのか。

王族つてのも大変なんだろうな……。

やっぱりとセラの頭を撫でてやると、抱きつく力は弱まった。

それでも離れようとはしない。

俺がどうやってセラんび離れてもらおうかを考えていると、後頭部に衝撃は走った。

「朝っぱらから盛ってんじゃないわよ！」

「つてえな！ 盛ってねえよ！」

頭を叩いたであろうシュイを睨みながら声を荒げる。

しかし、シュイは平然と受け流しそっちが悪いんじゃないかなーラをかもし出している。

さて、どう報復してやろうか

などと考えていると、俺に押し付けられていたセラの頭がもぞもぞと動いた。

ちょうどお腹の辺りに頭があるため、動かれると妙にくすぐったいのだが、ぐっと堪える。

何事かとセラを見ると、俺に抱きついたまま状態でシュイのことを

見上げていた。

それに気づいたシュイも優しい声でどうしたの？ と尋ねる。
しばらく無言でシュイのことを見つめていたセラがふと口を開いた。

「・・・お姉ちゃん」

シュイが笑顔を浮かべたまま固まった。

そして次の瞬間、俺の視界はぶれて、気がつけば朝日に照らされた
青空を眺めていた。

「あゝん、セラちゃん可愛い。私末っ子だったから妹欲しかった
のよ」

声のするほうへ顔を向けると、シュイがセラ抱きしめつつ頬刷りを
していた。

・・・どうやら理性の装甲は鉄くずと化したようだな。

分からなくもない、俺もお兄ちゃんと呼ばれた瞬間クラッとしたく
らいだ。

幸いにも、^{まどか}円で慣れていたのと鈴音の逆鱗を思い出して踏みとどま
ることができた。

そんなほのぼのした光景を見ながら俺は、朝食の準備に取り掛かっ
た。

門音の災難、トラウマよ再び

俺たちはあれから、何事もなくウィッチの里目前まで来ることができた。

昨日、日が沈む頃にウィッチの里に程近いこの村にすることができた。

時間も時間だということでウィッチの里には明日向かうということで宿を取り、一夜を明かした。

朝食を食べ終え、さて行こうかと俺が声を掛けると、シユイが準備があるからと俺を手招きで呼びつけて部屋に戻った。確かに、これから森に入るのだから準備は必要だろう。しかし、しかしだ

「なぜ俺が女装なぞしなきゃなんのだ！」

そう、俺は現在進行形で服を脱がされそうになっていた。

「仕方ないでしょう、ウィッチの里には女の人しか入れないんだから」

宿の一室で体のあちこちを触られ、満足げに頷いているシユイを恨めしげに睨んでやると、プイッとそっぽを向かれてしまった。

どうやら俺の体の採寸をしていたらしいが（魔法で）、色々とむず痒かった。

「物申すぞ！俺はここで待ってればいいだけの話だろう、ウィッチの里まで近いんだろ」

「それは・・・」

俺の問い詰めにシユイは何か言いにくそうにもじもじとしていた。

「それは、何だよ、何かあるのかよ」

シユイは諦めたようで、あーもう！とか愚痴りながら訳を話した。

「初めてなのよ、ウィッチの里に来るのが！ だから不安なの！」

だからと言って用意に女装を容認できるわけもない。

「ふざけんな！ そんなこと俺の知ったことじゃない！」

なおも抵抗を続けるが、後ろでしつかりと俺の両手を押さえるセラを振りほどくことができないのだ。

セラは俺を抱えた状態で屋根の上に飛び乗れたり、自身の二倍はあろうかという大剣を振り回せる怪力の持ち主だ。

そんな奴を振りほどこうって言うのがそもそも無理な話だ。

結局俺は物理的に力負けをして女装させられる羽目になった。格好については語りたくない。

「……………なんというか、理不尽よ！」

「お前の方が理不尽だ！」

着替えが終わり、化粧を施した辺りでシユイが切れた。

「どーして男のあんたの方が女の私より綺麗なわけ！」

「……………綺麗とか言うな」

シユイの言葉に軽くトラウマを思い出した俺は体を震わせた。
あれは、今思い出しても恐ろしい……………。

「ちょ、ちよつと、どうしたのよ突然」

「ん、いや、ちよつとな、思い出したくない思い出が……………」

「……………何だか知らないけどさっさと行くわよ!」

誰が引きとめたんだよ、という突っ込みは辛うじて喉の奥にしまいこむことができた。

シユイはさっさと宿を出て行ってしまい、ラルもミヤオ以外に特に持つ物はない為先に部屋を出ている。

俺は、普段は首の後ろで束ねっぱなしにしている髪を解き、二三度頭を振って髪を散らしてから荷物を持ち、二人の後を追った。

俺は特に自分の容姿がどうか気に掛けたことは無いが、双子の妹である鈴音が絶世の美少女であることからそれなりに整ってはいるのだと思っていた。

鈴音は女性にしては身長は高く、声質もやや低めと、小さい頃は良く男の子と間違われていた。

逆に俺はというと、男にしては少し背が低く、声質も高めと、中学生になってからも私服姿だと女の子に間違われることが多数あった。それもこれも、服を選ぶのが毎度のことながら鈴音で、どうにも女の子が着るボーイッシュな服ばかりだったせいと、髪を切ると泣き出す母親のせいだ。

うちの母親は無類の長髪フェチで、双子である俺らの、自分に似た艶やかな髪を撫でてはうつとりしていた。

今でこそ、俺の髪も肩口くらいまでしかない(それでも男にしては

十分長い）から見分けは着くものの、中学を卒業するまでは俺と鈴音は見分けがつかないほどそっくりだった。

いや、今でも髪の長さ以外は殆ど同じだ。

俺の体は女性ホルモンが多いのか、華奢で色白、喉仏もパツと見では分らないだろう。

声だって、アルト寄りのテノールでハスキーボイスとして女性でも通用する。

何が言いたいかというと、女装した俺は絶世の美少女たる鈴音と瓜二つと言うことで、それは何を表すかというと

「あの、俺と付き合ってもらえませんか？」

「さようなら！」

告白のラッシュということだ。

宿を出てから、俺を見て完璧に固まったシュイを正気に戻した辺りで、村にいる男どもが俺にアタックを開始し始めたのだ。

それから村の出口まで行く間に7人から告白された。

そして今、出口で8人目の告白をぶつちぎって森を目指して爆走していた。

「くそ、俺は男だつつつの！」

「………慰めも言葉も無いわ」

隣を並走するシュイが哀れみの視線を向けている。

「もう二度と女装なんてしないからな！！」

一年前のトラウマとデジャブした状況に俺は涙を零しながら走り続

けた。

門音の災難、トラウマよ再び（後書き）

はい、っということで門音を女装させて見ましたがいかがでしたでしょうか？

何だかんだといいながらこっちは話しのネタが尽きないんですね。
門音くん弄りやすいし 笑っ

次はやつとウィッチの里突入です。

こつこつのを骨折り損のくたびれもつけて言っただぜ（前書き）

多少痛々しい表現とY談ギリギリの内容が含まれていますのでお気をつけください。

こつこつのを骨折り損のくたびれもつけて言っただぜ

森に入って道無き道を突き進んでゆくと、パツと開けた場所にでた。どうやらここがウィツチの里らしい。

俺が想像していたものよりも、いたって普通な里だった。

先に先刻を受けていた通り、女性しか見られないが……。

「何者だ！」

俺がその景色に目を奪われていると、目の前に三角帽子と呼ばれる鍰つばが広く先の尖った帽子を被った女性がこちらに、というよりも俺に杖を突きつけていた。

「あゝ……私たちは」

「黙れ！」

俺がシュイと打ち合わせした通りに言葉を発しようとして氷の柱が飛んできた。

三角錐の形をした柱は俺の横を掠かすめ、直ぐ後ろの木に突き刺さった。まさに問答無用という奴だ。

予定と異なる展開に、一瞬頭の中が真っ白になったが即座に状況の解析に入った。

なぜ、こうまでもあちらが好戦的なのか、まずはその理由だ。

男子禁制の里と言うことで、色々と屈辱的ながらも女装して、少なくとも男には見えていない格好でここまで来た。

しかし、向こうは明らかに俺だけを敵視している。

この判断材料からみて、答えは簡単。

俺が男だとばれている。

そこで、思考の海から浮上すると、いつの間にやら俺は三角帽子を被った女性集団に杖を向けられていた。

さらに、その向こうにはいつの間にも移動したのかシュイとラル&キユイが魔女の一人に匿われていた。

「もう大丈夫だリトルウィッチたち、君たちを危険に曝す者は我々が排除する」

どうにも聞き捨てなら無い。

「ちょっとま」

「黙れと言っている！」

再び放たれる氷柱をギリギリで回避して、魔法を放った魔女を見る。

ここで彼女らと敵対するのは簡単なことだが、そうすると後々面倒なことになってくることは想像に難くない。

しょうがないと、俺は降参の意味を込めて宗近を魔法を放った魔女の足元に放り投げ、頭の後ろで手を組んだ。

魔女は怪訝な顔をしていたが、こちらに抵抗の意思がないと見ると土系統の魔法なのだろう。大地から伸びた足かせを嵌められた上で魔女が口を開いた。

「女装して姿を誤魔化したあげく、二人のリトルウィッチを連れてこの里への侵入を試みた愚かな男に聞く、何用だ！」

とりあえず初見で男と分かってもらえたのは嬉しかったが、色々と誤解だらけで正直泣きそうだ。

「プロランテの魔女医さんから言伝を頼まれた。ルドラ溪谷の谷底にイビルズホワイトが群生している。至急対策を、とのこと。詳しいことはそこにいるシュイに聞いてくれ」

俺の言葉に周囲一体騒然となった。

魔法を放った魔女が周りの魔女に指示を出していく。

どうやら彼女がこの中では一番偉いらしい。

一通り指示を出し終えたのか、彼女は俺の方へ近づいてきた。

「セノリアンテ様の使いだっただとはな、突然の攻撃、失礼した。私はウィッチビレッジガーディアンの団長を務めるリアリレッタだ」

リアリレッタは俺に掛けた足枷の魔法を解除して杖をしまった。

「門音だ、とりあえず刀を返してくれないか？ 大切な物なんだ」

俺の言葉に頷くと、指をツイッと動かして落ちていた宗近を俺の前まで移動してくれた。

それを受け取り、その重さを確かめる。

「それで、俺はこれからどうすればいいんだ？ 詳しく事情を話すなら里長の所に行かなきゃならない。その為には里に入る必要があるんだが？」

「里に入りたければ男を捨てろ」

「……………この格好を見てそれを言うか？」

「両足の付け根の物を切り落とせば入れてやる。里は男子禁制だからな」

事も無げに恐ろしいことを言うリアリレッタに思わず身震いした。
流石にそれは勘弁願いたい。

「……………はあ、仕方ない、ここで待つことにするさ。まだ男
たる尊厳を失いたくないしな」

「もったいない奴だな、それだけの容姿をしていながら……………」
「

「好きでこんな格好してるわけじゃねえよ」

「違うのか？あまりにも違和感がないからそういった趣味の持ち主
かと思ったが……………私ですら魔法を使わなければ見抜けな
かったしな」

「……………なるほど、ネタは魔法か。つつか、俺をそっち方面の危険
人物扱いするな」

「なあ、やっぱり切らないか？ 男にしておくにはもったいなさ過
ぎるぞ」

「切らねえよ！ つてにじり寄ってくるな！ 杖を構えるな！」

「安心しろ、痛いのは一瞬らしいからな。そもそもあんなおぞまし
い物なぞ必要ないだろう？」

「ばかやろう。その一瞬で死んじゃうわ！おぞましいとかお前、見
たことあんのかよ！」

「ある分けなからう！さて、覚悟はできたか？」

「できるか！！って不味い、ここは不利すぎる！一時撤退！」

「まて門音！逃げるな！」

俺は180度方向転換して全力で駆け出した。

シユイたちが戻ってくるまで俺は逃げ切れるだろうか？

背後から放たれる異様な殺気と風の刃に冷や汗を流すのだった。

「ついついの骨折り損のくたびれもつけて言っただぜ（後書き）

今回は色々と新しい固有名詞を出したのでおさらいしたいと思います。

魔物の襲撃された街の名前「プロランテ」

その街の魔女女医でシュイのママさん「セノリアンテ」

ウィッチの里のガーディアン団長「リアリレッタ」

P S ・男の子を切っても女の子にはなれません（笑っ

偉大なる魔術師！？

リアリレッタから逃れるために我武者羅に森の中を駆けた。

そのおかげか、リアリレッタは振り切ることができた。がしかし、完璧に迷ってしまった。

当たり前だが、右を見ても左を見ても木ばかりが見える。

目印となるものもなく、足を止めればたちまち魔物の襲撃にあう。屠^{ほふ}った魔物は数知れず。

返り血で服が湿り、気持ち悪いことこの上ないが変わりの服がない為脱ぐわけにも行かない。

ふらふらとさ迷っていると、ぼつりと建つ一軒の小屋を発見した。これ幸いとそこで少し休ませてもらおうと、扉をノックする。

空き家だとは思うが、仮にも先客が居た場合、失礼に当たると思ったのだ。

しばらく待っても返事がなく、誰もいないのだろうと取っ手に手を掛けようとしたところで扉が内側から開かれた。

「こんな森の奥に一体誰だ」

ブスつとした声で呟きながら扉を開けたのは二十台後半くらいの男だった。

第一印象としては普通。

どこにでもいるような普通のおにーさんにしか見えない。

ラフな絵柄TシャツにGパン、若干癖の混じった髪の毛は濃いこげ茶色をしていた。

しかし、だからこそ違和感を感じた。

ここは異世界だ、ラルやシュイを見ていた限りではTシャツもGパンも存在しないし、服だってせいぜい綿がいいところである。

では、なぜこの男はこんな格好をしているのか？

俺の疑問が問題へと変わる前に、男の放った言葉にしばし考えるのを中断する羽目になった。

「んあ、日本人じゃねえかなんでこんなとこに居んだあ？」

「・・・・・・・・日本を知つてのか!？」

俺の驚愕にしまったと顔をしかめ、何事も無かったかのようにドアを閉めようとした男を逃がさないように腕を万力を込めて掴む。

「痛い痛い! 骨が砕ける!！」

俺の手を外そうともがきながら叫ぶ男にこちらの要求を言う。

「とりあえず、俺の質問に答えてもらおうか」

「わ、わかった! 答える! 答えるから腕を離してええ!」

その言葉に一度頷いて手を離してやると、掴んでいたところにしつかりと俺の手の跡が残っていた。

男は乱暴だなど愚痴りつつ、俺を家の中へ促した。

小屋の中へ踏み入って俺は絶句した。

なぜなら、あたり一面フィギュアやらポスターやらで埋め尽くされていたのだ。

いわゆるゆるオタクの部屋そのものだ。

「そこいらへんに適当に座つてて、今飲み物をだすから」

男はそういうと、棚の中から普通にペットボトルのウーロン茶をコップにそそいだ。

それを俺の座る椅子の前に置き、男は俺と向かい合わせになるように座った。

「さて、まずはお互いに自己紹介と行こうじゃないか。お互い、名前が分からないと不便だろう?」

男の言葉に一理あるなと思い素直に頷いた。

「僕はケンプファー、ケンプファー・サレジエッド。見ての通り、魔術師さ」

「どこが!?!」

俺に罪は無い、反射的に突っ込みを入れてしまったのは長年の癖だ。仕方の無いことだ。

だって考えても見る、TシャツGパン姿の二十台後半の男が室内をオタクチックにしているとどこに魔術師と分かる要素があるだろうか?

「さあさあ、次は君の番だよ美少女君。聞きたいことは多々あるだろうが、こちらは名のつたのだからそれに順ずるのが礼儀って物ではないのかい?」

その通りだ。

向こうが名のつてこちらが名のらないのは失礼に当たる。

「俺は門音、久我門音だ。お前の知つての通り日本人だ」

「久我? どこかで聞いたことあるような……ああ、思い出したよ! 確かこの世界に僕が最初に招待した青年が確か久我って苗字」

「お前が元凶か!!」

「おふう！」

殴った。

とりあえず問答無用でケンプファーとか名のつたこの男の顔面を殴り飛ばした。

いや、だって、俺がこんな異世界に来ている元凶が目の前に居たら殴るしかないでしょう。

「ちょ、暴力反対!っというか、なんで僕が殴られなくちゃならないのさ! 僕が何をした!」

「あん? とりあえず答えろ、兄はどこだ?」

宗近に手を掛け、チャキリと音を鳴らす。

「兄? カドネ君は聖君の妹かい?」

「.....俺は、男だ」

「え.....変態?」

「死ねえええええ!!!!!!」

宗近を鞘から引き抜いてケンプファーを切りつけた。

「うひゃあ! よくよく見たら天下五剣が一つ、三日月宗近じゃないか! 国宝だろっ君!」

済んでのところで風魔法に防がれたのを見ると、かなりの使い手と見える。

今の抜刀は自分でもなかなかだと思えるほどの速度で威力だった。それをいとも容易く防がれたのは軽くショックだ。

「つつかなんでお前はそんなに日本に詳しいんだよ！」

そう言った瞬間、ケンプファーの目がキラんと輝いた。

「良くぞ聞いてくれた！ 僕はこう見えてもこの世界一の魔術師でね、色々と極めていく内に異世界への転移に成功したんだよ。そんなもって地球の素晴らしさに感化されて度々足を運ぶうちに詳しくなってしまったのだよ」

「そんでもってこのシヨタフィギュアとポスターの山か……………」

「

「最高じゃない？ 秋葉原」

「もう黙れよオタク……………」

「いいや黙らない！ 僕が始めて秋葉原へと行ったときの感動には……………」

話しが盛大にそれていくがこの手の相手に何を言っても聞かないから聞き流すことにした。

閑話休題

「んで、その流れてパソコンの使い方を覚えるためにホームページ

を作ったと」

「そういうことだ、素晴らしいページだっただろう？」

「まあ・・・できればは否定しないが、痛いことこの上ないな。おまけにあの召喚の奴って魔術だろ？ よくパソコンのホームページに組み込めたな」

「凄いだろう？ まさに『科学と魔術が交差するとき、物語は始まる』って感じで！」

「幻想殺しの話しか！ あれは俺も面白いと思ったな。神話関係の所が特に・・・」

—— 3 時間経過 ——

「君はシヨタの素晴らしさが分からないのか！」

「わからねえよ！」

「あの無垢な瞳、穢れを知らぬ微笑、天使のごとき無邪気な心、最高じゃないか！」

「・・・まあ確かに子供は好きだ。特に女の子なんかはお手伝いとかもしっかりしてくれるしな」

「ほうほう、君はロリコンなのか」

「ちげえよ変態！」

——さらに1時間経過——

「・・・・・・・・随分と話しこんでしまったようだ」

「スゲーくだらない内容だったけどな・・・・・・・・」

「そつえば今更だが、門音はなぜここに着たんだい？」

「ああ、ウィッチの里にとある人物の護衛として来たんだが、色々あつてな・・・・・・・・」

「察した、ご愁傷様と言っておこう。それより、こんなところであぶら売ってていいのか？」

「迷ったんだよ、魔女に追われて・・・・・・・・」

「ふむ、色々と納得できるな。ああ、刀に手を掛けるな。里にならここから東に行けば着くさ」

「こんな森の中で方角なんてわかんねえよ」

「仕方ない、ここは一つ新たな友のために一肌脱ぐとしよう」

ケンプファーはそういうとスラスラと紙に何かを書き始めた。

ちよっとすると書き終わったのか、それを反転させて俺に見せる。

「この森の地図だ。術が刻んであるから自分がどこにいるか分かる」

やたら短い時間だったくせにかなり正確な地図になっていて、俺が居るであろう場所には逆三角の印がある。

「これがあればこの森で迷う心配はない、さあ、行きたまえよ。私はこれから買い物に出かけるのだから」

「おお、サンキューな」

俺はそう言ってケンプファーと硬い握手を交わした。

「地球に戻るときは訪ねてくるといい、住所さえ教えてくれればそこへ送り返してあげるよ」

「おう、頼むぜ」

意外なところで元の世界へ帰る手段を確立した俺は、森の地図を片手にその小屋を後にした。

偉大なる魔術師！？（後書き）

意外と重要人物として登場しましたケンプファー。

彼の性格など、どうしようか本気で迷った・・・。

色々と考えに考え抜いた末にあんなトンデモキャラになってしまったのはご愛嬌（笑っ

静かなる逆鱗

俺がウィッチの里に着いたとき、そこは先ほどの心温まる穏やかな空気はなく、あちこちが壊され怪我をした守備隊ガーディアンがそこかしこに倒れているという状態だった。

「リアリレッタ！　いったい何があった！」

その中で見知った顔を見つけ駆け寄る。

リアリレッタは腹部に槍で突かれたらしく、そこから血が流れ出ていた。

「つつ……カドネ、か」

「何があったんだ？」

突かれた場所の服を裂き、怪我の具合を見ながら何があったのかを聞き出す。

「マウケラスの奴隷商が、得体の知れない化物を連れて……
っ」

傷はそれほど深くはなく、止血さえしておけば命に別状は無いだろうと判断した俺は自分の服を破いてそれを包帯代わりに使った。

「事情は分かった、シュイとラルもそいつらが連れて行っただんな
？」

「ああ、すまない守りきれなかった」

本当にすまなそうに謝ってくるリアリレッタの頭にポンと手を置いて立ち上がる。

「気にすんな、それよりもその化物について教えてくれ」

「・・・・・・化物は、黒い体をした八足のクモみたいなやつだった。ただ、尻尾が長く鋭かった上に馬と同じ大きさをしていたのが10体はいた」

リアリレッタの説明でとっさに浮かんだのはサソリだった。

砂漠にひそむ猛毒をもつ昆虫で、正直気持ち悪いやつだ。

「皮膚は鋼のように硬く、魔法も殆どダメージを与えられなかった」

「そうか・・・・・・」

少し厄介だなと思いつつも、勝てない相手ではなさそうだなと思考をめぐらせていた。

そのとき、森の方から草を掻き分ける音と助けてという叫び声が聞こえ、その瞬間声のするほうへ駆け出した。

そこには、地面に押し倒されて服を破かれたウィッチの女性一人とそれに馬乗りになる卑下した男一人、女性を押さえつける男二人の姿があった。

瞬時に状況を理解した俺は、馬乗りになる男を全力で蹴り飛ばした。見事に首に決まった蹴りにゴキリという鈍い音を響かせながら吹っ飛んで倒れる。

何が起ったかわからない状況の二人の男も問答無用で殴り飛ばした。

「貴様ら、今何しようとしてた!!」

最初に蹴り飛ばした男は動く気配を見せず、後から殴られた男の一人も顔面が陥没している。

したがって辛うじて意識の残っていた男を片手で掴み上げて睨み付けた。

「ひい!」

あまりの恐怖に引きつった声を上げる男の首に手を掛ける。

「他に、連れて行った女性たちはどこだ?」

徐々に首に掛けた手に力を入れながら男に問いかける。

「こ、ここから東南に向かったところにある棄てられた砦に……」

「そうか」

首に掛けた手をそのまま持ち上げ男を中吊り状態にして、空いている右手を男の急所へ伸ばし、握りつぶす。

男はそのまま泡を吹いて意識を失ったのでそこいらに適当に投げ捨てた。

「下衆にはお似合いの結末だ」

そう呟いてから、先ほどの女性へと向き直り笑顔を向ける。

「大丈夫だった?」

「あ・・・・・・・・はい」

恥ずかしそうに胸元を隠す姿に、俺は視線を逸らしながら目についた俺の服を女性に渡す。

「随分とえげつないことをする物だな」

わき腹の怪我を押さえながら歩いてきたであろうリアリレッタがそう言った。

「それは好きにしてくれ、俺はシュイたちを助けに行く」

動かない男どもを見ずに言いながら、服装を男着に着替える。

この世界には無いGパンとTシャツという、こっちに來た時の格好だ。

「勝手に申し訳ないが、村の皆を救ってくれ」

頭を下げるリアリレッタを見ながら、宗近を腰に括りつける。

「あいつらは俺の逆鱗に触れた。そして、手を出してはいけない者に手を出した」

話しの内容がイマイチ理解できなかったリアリレッタは顔を上げた。

「それが、理由だ」

「なんのだ？」

眉をしかめ、真直ぐにカドネの顔を見てくるリアリレッタに感情の無い声で返す。

「俺が、これから人を殺すためのだ」

カドネがその言葉を口にすると同時に、流水のように静で、それでいて底の知れない怒りが感じられた。

「ここは、シュイの言わば故郷だ。誰一人掛けることなく助け出す」

言うやいなや、カドネは地面を蹴った。

日本武術の縮地法しゅくちほうと気功術の弓身弾影きゅうしんだんえいを用いた超速移動である。

弓身弾影は、弓のように身をしならせ、全身のバネを使って一気に距離を駆け抜ける瞬間移動のようにしか見えないという究極の肉体技だ。

それとは別に、縮地法は長い距離を少ない歩数で進む技術である。

それらを組み合わせることで、とてつもない速さで移動することができる。

以前一キロメートルで時間を計ったとき、二〇秒を切れたことを考えれば先回りできるだろう。

門音の目には恐ろしいまでの殺意が籠っていた。

偶然の出会い（前書き）

大変お待たせいたしました。
久々の更新です。

偶然の出会い

森を抜け走ること数分、檻のような巨大な馬車の中にサソリのようなモンスター——八手サソリとでも言うのか——を押し込めた一団を視界に捉えることができた。

それと同時に速度を落とし、上がった息を整えながら様子を伺う。

「敵の数は……12、3つて所か」

腰の宗近に手を沿え、タイミングを計る。なるだけ気づかれぬように、こちらを見ていないときに駆け出せるように。

しばらく距離を保ちつつ様子を伺っていると、なにやら騒がしくなり檻から八手サソリを解き放った。

どうやら先に突っかった奴が居るようだ。

これ幸いと門音も駆け出す。

近づくにつれて八手サソリを操ってるだろうと思われる男を発見する。

単体なら問題ないが、統率の取れた10匹の八手サソリが厄介なのは想像に難くない。

というわけでまずはその男を仕留めることにした。

向こうは別の相手に気を取られ門音には気づいていない。

サソリ男との距離が5メートルに迫り、相手がこちらに気づいたが既に遅い。

宗近を抜刀し、七ノ型・断空鎌鼬で真つ二つにした。その余波で八手サソリを2匹ほど仕留めることができた。

統率者を失ったことで八手サソリが見境なしに人を襲い始めた。

自分に向かってくる奴だけを倒しつつ、別で戦ってるであろう人物の場所へ向かった。

数十人という山賊紛いの男たちを相手にしていたのは言葉を失うほ

どの美貌を持つ二人の女性と一人の少年だった。

三人の中でもっとも果敢に攻め込む、赤い髪をなびかせながら戦う女性は細身の剣・レイピアを的確に急所へと突き刺していく。

それを補佐するように戦うのがもう一人の髪の青い女性だ。

こちらは短槍を使い、剣の間合いの外から確実にダメージを与えていく。

二人ともかなりの腕前であることはわかるものの、今一つ強打に欠ける。

後ろに居る少年は杖を持っているところを見るに、魔術師か何かなのだろうが攻撃する気配を見せない。

しかしながら何かを唱えているのは分かる。

片手間に八手サソリを屠りながら見ていると、少年が杖を掲げた。すると、前線で戦っていた女性二人を光が包み込む。

どういった効果があるのか分からないが、あの少年はサポート系の魔術師なのだろう。

いくら彼女らが強くてもあの数を相手にしていたら体力が持たないだろう。

各言つ俺もここまでの疾走のせいで余裕が無い。

敵の敵は味方というわけで……

「その三人！ 助太刀する！」

大声でこちらの存在と敵でない事をアピールし、三人が戦ってる集団の中へ飛び込んだ。

「久我流抜刀術四ノ型・遍断ち！」

突然のことで動けなかった賊をまとめて切り捨て、動揺が走った隙に三人と合流する。

「あなたは・・・」

「まずはあいつらを、全てはそれからだ！」

言うや宗近を抜刀する。

「久我流抜刀術五ノ型・残空十字！」

目の前に居た男が四つに切り分けられ、その近くに居た奴らも斬撃に巻き込まれる。
あらかた賊を始末すると、今度は八手サソリがこちらへと向かってきた。

「あれは・・・・デビルテイル！」

「ハウメル大陸のモンスターが何故ここに！」

デビルテイルという八手サソリを見て驚く三人を横目に門音はさつさと間合いを詰める。

「さて、そいつに剣は」

青髪の女性が何かを言い切る前に足の一本を斬り飛ばす。

基本門音は抜刀術を使うが、抜刀術しか仕えないわけではない。

「兜、割りいいいい！！！」

頭上から振り落とされた宗近によって胴の半ばまで切り裂かれたデビルテイルはそのまま絶命した。

「あと4匹！」

次々とデビルテイルを切る門音を三人は呆然と眺めていた。

しばらくして最後の1匹を仕留めた門音にはっと我に返った三人が駆け寄ってきた。

「凄いな、剣をも弾く鋼の外皮を持つデビルテイルをいとも容易く切り裂くとは」

「私たちだけでは正直厳しかった、助かったよ。ありがとう」

赤髪の女性がスツと頭を下げる。

「別に大したことじゃないさ、俺もこいつらには用があつたからな」

「そうだったか。私はシア・スリーブという」

頭を上げた赤髪の女性——シア・スリーブが右手をこちらにだして

「勇者をやっている」

そう言ったのだ。

偶然の出会い（後書き）

最近読むのに忙しくて全然執筆していないという事実・・・

近々登場人物紹介を乗せる予定

突撃！ アジト潜入

それからお互いに自己紹介を終え、現在奴隷商が雇ったであろう盗賊団のアジトらしき場所へ向かっていた。

「しかし、こう言うてはなんだが本当に珍しい。あの問題児のルアが懐くとは……………」

青髪の女性ことルーベル・クオルカンが俺のことを珍獣でも見るかのように眺めてくる。

意外なことに彼女はあのヴァラルアのお姉さんなんだそうだ。クオルカンの武神三姉妹と言われるほどに普段から城を抜け出して色々とやらかしていたらしい。

スネークソードのルシカ、ハルバードのルーベル、タイタンブレードのヴァラルアという呼び名をそれぞれ持っていると教えてもらった。

「前がどうだったか知らないけどさ、少なくとも一緒に旅してきた間はしっかりと自己主張してたぜ」

「あの無表情から感情を読み取るとは……………」

俺とルーベルの直ぐ後ろを疾走するシアが感心しているが、別段難しいことではないと思う。

「つと、マルク、大丈夫か？」

俺らより若干遅れて着いてくるこのパーティー唯一の男手たるマルク・シャード副神官は既に息も絶え絶えだった。

「マル坊遅いぞ、男なら意地見せろ」

「もう少しだ、頑張れ」

なんとも辛辣な応援だと思う。

マルク君はけて足が遅いとか体力が無いというわけではない。

ルーベルとシアの体力と走る速度が異常なのだ。

かれこれ10分近く1000m10秒を切るペースで走り続けているのだ。それに何とかついてきているマルク君はかなり優秀だろう。この面子でさえなければ……

「マル君、どうやら目的地に着いたみたいだよ」

太陽がそろそろ地平線の彼方へ沈み行く時間なのか辺り一面オレンジ色に染まるなか、その砦は堂々と君臨していた。

「さて、やることの確認と行こうか。まず捕まってる人たちの救出、これはそっちの三人でやってくれ。俺は派手に暴れて敵の目を引きつけておく」

「陽動作戦ということね」

「わかりました。コウガさんお氣をつけて」

「おう、そっちな」

そうやって俺は正面から砦へと駆け出した。

コウガと名乗る少年と別れ、皆へと侵入したシアたち。

「あのシアさん、少し気になることがあるんですが」

マルクが二人の後ろから声を掛ける。

「なにマル坊用件は手短にね」

後ろを見ずに返事を返すシア。

流石に敵地に侵入しているだけあって周囲を警戒することは怠らない。

「はい、コウガさんのことなんですが……もしかしたらコ
ーキ殿の関係者かもしれません」

流石に予想外のマルクの推測にルーベルが反応する。

「どうということマルク？」

「えつとですね、コウガさんが僕たちに加勢してくれるときに使った業なんです、なんて言っていたか覚えてますか？」

周囲を警戒していたシアが振り返り額に皺を寄せながら口を開く。

「たしか『こがりゆうばつとつじゅつ』なんちゃらとか言つのでしょそれがどうしたの」

「忘れたんですか、コーキ殿の名前」

「そうか！ コーキ・コガ、コーキ様の世界では家名が先に来ると
いていた」

「そうです、そうになると家名がコガ、名がコーキとなります。そう
なると『こがりゅう』というのはコーキ殿の家が持つ武術なのでは
ないでしょうか？」

「なるほど……」

いつしか三人は侵入した砦内ということをすっかり失念していた。
そのせいで

「貴様らなにもんだ!!」

賊に気づかれてしまった。

「仕方ない、蹴散らすよ!」

シアはそう言うやレイピアを抜き賊に踊りかかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9938j/>

兄と俺とのはちゃめちゃ冒険記

2010年10月8日22時33分発行